

暖かい冬？ ／ 須坂市地域おこし協力隊 古川広野の『ただいま！峰の原高原』 vol.9

新年あけましておめでとうございます。

長野県須坂市峰の原高原地域おこし協力隊、古川です。今年もどうぞよろしくお願いします。

この記事では、現在の峰の原高原の様子を皆さんにお伝えしていきたいと思います。

●樹、切る。

峰の原高原では、昨年ばっさりと樹が切られました。峰の原高原こもれび広場、見晴らし台から少し降りたところです。白樺や松など、背の高かった木々が一気になくなりました。おかげでずいぶん広くなり、景色も良く見えるようになりました。見晴らし台から槍ヶ岳まで見渡せます。秋に切ったばかりなのでまだわかりませんが、今年の春、夏にどのような景色になるか、とても楽しみです！

「草原をつくろう」といったイベントなどを通し、貴重な山野草を守る活動もしています。すぐにとはいかないかもしれませんが、いずれは広く芝の着いた地面になってくれれば素敵な草原になりそうな気がします。



伐採前



伐採後



●冬

さて、今年の冬は暖冬と予想されています。なんだかこのところ毎年暖冬という予報を聞いているような気がします…。たしかに去年の同じ時期と比べてみると、雪がかなり少ないです。下の写真は2019年12月19日の峰の原高原の写真です。雲がかかっているように見えますが、奥に見える山が根子岳と四阿山です。雪がまばらにしかついていないことがうかがえると思います。通常12月のこの時期であれば、年々雪が少なくなってきたといえ多少雪がついて白くなっているのですが、今年は本当に暖かい日が多くてすぐ溶けてしまっています。



かつて峰の原高原スキー場や、峰の原高原に隣接する菅平高原のスキー場は12月1日にオープンしていましたが、今じゃとても考えられません。世界の平均気温は、30年以上にわたり平年値を超えているとのこと。普段の生活の中では気付きにくいかもしれませんが、年々暖かくなってきているんですね。

しかし一方で、最も低い気温を見ると峰の原高原では-20℃を下回る日が年に何度かあります。暖冬とはいえ標高1500メートル地点での冬です。寒いときは寒いです。今年も油断せず過ごしていきたいものです。去年は年が明けてすぐ体調を崩してしまったので今年はそんなことがないようにしたいです…。インフルエンザもはやっていますし、受験生にとってはとても大切な時期でもあります。皆さんも体調には気を付けてお過ごしください。

●峰の原高原のスキー場、クローズ

峰の原高原にとって、スキー場は大きな観光資源の一つでした。既に知っている方も多いと思いますが、2019-2020シーズンでは峰の原高原リゾート（峰の原高原スキー場）が運営できないということになりました。（詳細は峰の原高原リゾートのFacebook ページをご覧ください）峰の原高原でスキー場が始まって以来、運営をしないシーズンは初めてということです。日本では、かつてブームだった1990年代に比べると、現在のスキー人口が1/3程度まで減少しているそうです。（レジャー白書（公益財団法人 日本生産本部）より）

私はスキー場の専門家でもなんでもないし、スキーの事業にかかわったこともほとんどありませんが、単純に数字だけをみても近年スキー場の経営がとても厳しいというのは容易に想像できます。そしてその波がついに峰の原にも来たようです。地元の方を始め、今までよく峰の原高原スキー場を利用していたお客さんなど、多くの方からスキー場の今シーズンのクローズを残念に思う声を聞きました。昨年企画で行った「スキー場への手紙」でも、幅広い世代の方から様々な思い出が語られており、愛されていた場所だったのではないかと思います。仕方のないことなのかもしれませんが、やはり少し寂しいですね。

峰の原のペンションにとって、スキー場が今冬経営しないということはやはり無視できないものでした。冬場はスキーを目当てに来ていたお客さんもいたくらいなので、当然といえば当然です。スキー以外にも冬を楽しむ方法はあります。しかしそれが直接的な誘客に

なるのでしょうか。実際のところ、各ペンションオーナーさんがどのように考えているのかはわかりません。峰の原における冬場の観光を考え直す必要があるのかもしれない。



●終わりに

近年異常気象が多いといいますが、台風や突然の大雪など、たしかに予測がつかない気候が増えてきています。昨年も大変な年でした。峰の原高原も台風19号により一時孤立したり、道路が落ちたりしていました。きっと市内ではもっと大変な地域もたくさんあったことと思います。それでもみんなが頑張っている姿を見ると、すごく元気が出ます。

機会があればこの冬みなさんも峰の原高原に遊びに来てくれると、とても嬉しいです。

(須坂市地域おこし協力隊 古川広野)

No91 「須坂温泉の夜の顔」フロント係の山岸外治さん / 須坂市地域おこし協力隊 早川航紀の『須坂温泉の愉快的仲間たち』 vol.7

地域おこし協力隊の早川航紀（はやかわこうき）です。

今回は須坂温泉の夜の顔、フロント係の山岸外治さんの紹介です。

趣味はポケット六法を少しずつ覚えること。好きな食べ物は女房のつくる料理すべて。



(フロントでお客様を迎える山岸さん)

●須坂温泉古城荘にはいつから勤めていますか

私は須坂生まれ、東京育ちであります。2010年から須坂にUターンをし、移住しております。

●東京から須坂に戻って生活面で変化を感じたことはありますか

感激したのは水が美味しいことでした。勿論、空気も美味しいです。2019年には再婚しました。都会育ちの女房も須坂を大変気に入ってくれており、不自由なく充実した暮らしを満喫しています。難を言うなら夜は街中が暗すぎるくらい。ですが治安はとても良い場所です。

※クチュールニットの作者である奥様は須坂に移住し、お洒落に改装した土蔵で教室を開いています。

●須坂市内でオススメの場所がありますか

秘密の場所があります。（秘密なので場所は言えませんが）そこでは朝の8時半頃に左は北アルプス、右には北信五岳（妙高山、斑尾山、黒姫山、戸隠山、飯縄山）を見事にとらえることができます。須坂に住んでからこの景色を誇っております。また春夏秋冬を目と肌で感じられるのも毎年楽しく感じています。

●須坂温泉ではどのような仕事をしていますか

ひと月に10日間須坂温泉のフロントで日帰り温泉のお客様、宿泊のお客様の受付対応をしています。「いらっしゃいませ」「ありがとうございました」と心を込めて言うことを心がけています。また、売店の対応やチェックアウト時の精算の対応では決して間違っはいけないので常に緊張の糸を切らないよう励んでおります。



（ロビーを綺麗にすることや、お出迎いの看板の設置もお仕事です）

●最後に須坂温泉の良いところを教えてください

温まりの良い風呂、これが最高です。昔は湯治として利用されていたというように、須坂温泉のお風呂に入ると元気になります。知り合いに宣伝しまくっています。寒い時期だけでなく、疲れを感じた時や、元気になりたい時に是非須坂温泉にお越しください。夕方6時～朝8時にかけての限られた時間ではありますが誠意を込めてお出迎え致します。

須坂温泉古城荘 公式ホームページ

<https://kojousou.co.jp/>

（須坂市地域おこし協力隊 早川航紀）

No92 本気でやるから仕事は面白い！内装職人 / 須坂市地域おこし協力隊 宮島麻悠子の『須坂おもしろ人物記』 vol.7

こんにちは！地域おこし協力隊の宮島麻悠子です。

須坂で活躍している方へのリレーインタビュー、今回は「睦美装飾」の保延友映さんで

す。



宮島：保延さんは須坂市外から移住されてきたそうですね。いつ頃、どちらからでしょう？

保延さん：12年前、山梨県の甲斐市から移住してきました。妻の実家が北相之島なのですが、子どもが生まれるタイミングで妻が地元に戻りたいと希望して。

宮島：自分には縁もゆかりもない須坂に来るのに、抵抗は無かったですか？

保延さん：仕事さえできれば大丈夫かな、という軽いノリで、即「いいよ～」と言いました（笑）家業は兄が継いだので、自由の身でしたし。自分が30歳の時で、既に内装職人として10年キャリアがあったので、食っていける自信はあったんでしょうね。でも、移住する1年ほど前からハウスメーカーなど40社くらいに自分のプロフィール・経歴書を送って、「仕事請けられますアピール」はしていました。どこかの会社に就職する気はなかったもので、最初からフリーランスの職人として仕事をするつもりでした。

宮島：移住前からしっかり準備されていたんですね！手に職があると、移住の際も仕事の心配が少ないですね。移住してみて須坂はどうですか？

保延さん：町並みに趣があるのがいいですね。自分が生まれ育った所は特に観光らしい物がなかったの。あとは、とにかく人のつながりがあったかい！溶けこむには時間がかかったけど（笑）仕事も人のつながりで請けることが多いんです。みんなよく気にかけてくれて、優しいですね。

宮島：それは私も思います！ところで、内装職人というのは具体的にどんなお仕事をされているのですか？

保延さん：建物の内装仕上げ全般をやっていますが、壁紙が一番得意とするところですね。他にも、床貼り、窓周り、カーテン、ブラインド、ふすま、障子など手掛けています。住宅が9割くらいで、残りは店舗などですね。20歳の頃から父の内装会社に入って修行してきました。



この日の現場はとある新築住宅
壁の下地をひたすら平らにする作業は、キレイな仕上りに欠かせない大事な工程



宮島： そうなんですね。仕事は好きですか？

保延さん： 僕、仕事大好きなんですよ！ どうやったらキレイになるか考えて、施工の過程でキレイになっていくのが楽しいです。もちろんお客さんに喜んでもらえるのが一番嬉しいけれど、ハウスメーカーやリフォーム会社などから受注する仕事ってユーザーであるお客さんとなかなかコミュニケーションをとる機会が無いんですよね。本当はプランニングの段階でもっと色々提案したいんです。最近本物のデニム地でできた壁紙とか面白い素材も出てきてるんですよ。デニム風プリントじゃなくて、岡山で生産されたガチのデニム（笑）普通の壁紙に比べたらだいぶ割高だけど、もし本当にデニム好きなお客さんがいたら、ぜひ提案したいですね。今後はお客さんから直発注できる仕事も増やして行きたいと思っています。

宮島：デニムの壁紙、好きな人にはすごい魅力的ですね！では、仕事で大変だと思うことはありますか？

保延さん：人手が足りなくて体力的にきつい時があります。人材育成もやっていきたいけれど、こういう職人的な仕事って今の働き方改革に逆行する部分があるから敬遠されがちなんですよね。でも、この仕事の楽しさを子どもたちにも知ってもらいたくて、昨年わーくわくすざか（商工会議所青年部主催の子ども向け職業体験イベント）にも参加しました。今後はDIYワークショップなどもやっていきたいです。

宮島：まずは仕事の魅力を知ってもらうことが次世代を育てる一歩になるんでしょうね。仕事で大事にしていることは何ですか？

保延さん：とにかく「誠実に、プロとして仕事をする」ということです。父からもずっと「どんな仕事でもまじめにやっていれば必ず誰かが見ていてくれるし、信頼がついてくる」と聞かされてきました。やはりプロとしてお金をいただくからには最高の仕事をしなければと思っています。

宮島：どんな職種でもそこは共通していますね。ちなみに、ご自身の人生に大きく影響を与えた人や出来事がありますか？

保延さん：います！内装屋さんの親方だったのですが、とにかく豪快な人。一昨年、63歳の若さで他界してしまいました。自分の家を建てる時にあるハウスメーカーのモデルハウスに行ったのですが、そこの壁紙が今まで見たことが無いくらいキレイに貼ってあったんです。あまりに感動したのでハウスメーカーの方に誰が貼ったのか聞いたのですが、名前は教えてもらえなくて。でもある時、自分が施工していた現場の向かいでそのハウスメーカーの工事をやっていたので、「もしかしているかな？」と思ったりしたんです！いそいそ名刺を持って行って、「自分も内装職人をやっているんで、もし人手が足りなかったら呼んでください」と挨拶しました。その縁で時々一緒に仕事させてもらいましたね。めっちゃ仕事もするけどめっちゃ遊ぶ人で、「人生楽しく生きろや！」が信条。腕のいい職人だったのでいつも忙しくしていましたが、ちょっと仕事が空くとバイクで屋久島まで行っちゃったり、山登りも好きでよく連れて行ってもらいました。この人には仕事の仕方と遊び方、両方教えてもらいましたね。

宮島：すごく粋な方ですね。格好いいです！！しかしながら、仕事も遊びも「本気だから面白い」ってのはありますよね。

保延さん：そうそう。本気でいい物を作りたいと思っている会社さんとの仕事は本当に楽しいです。今はそういう会社さんばかりとお付き合いできているので、恵まれていますね。

宮島：色々楽しいお話をありがとうございました！次の方をご紹介いただけますか？

保延さん：アート サロン グレイスの笹岡理絵さん。
以前NBSまつりの職業体験に笹岡さんがブース出店しており、子どもが参加したのがきっかけで知り合いました。
わーくわくすざかにもご協力いただいています。

宮島：ありがとうございます。
というわけで次回はアート サロン グレイスの笹岡理絵さんに決定しました。

次回もお楽しみに！！

★バックナンバーはこちらのサイト内でもご覧いただけます

The secrets of SUZAKA 信州・すざかのないしょ話

(須坂市地域おこし協力隊 宮島麻悠子)

No93 ペンションってこんなところVol.2『ペンションマジョリカ』 / 須坂市地域おこし協力隊 日下未夕の『峰の原高原へお出かけください♪』 vol.5

こんにちは。峰の原高原地域おこし協力隊の日下です。峰の原高原では、二月に入り朝起きたら15cmから20cmほど雪が積もっている日やマイナス20度近く冷え込む日がちらほらあります。“冬本番”らしさを目で見えて感じています。



今回もペンションオーナーさんと話して感じた“ペンションでこんなところ”を紹介します。

第2弾は『ペンションマジョリカ』さんです。



●開業の経緯

ペンションマジョリカのオーナーご夫婦は、長野県須坂市内から峰の原高原に移住され、2005年に開業されました。ペンションをするなら音楽をテーマに…、ペンションを楽器の練習や演奏会場に…そんな想いを持って開業され、実際に一年に一度ペンションでコンサートを開いていらっしゃいます。

●ペンションの様子

ダイニングは、温かみのある明かりと大きな窓、高級感のある家具が印象的な空間。脇にはグランドピアノとドラムが置いてあるスペースがあり、音楽を身近に感じられます。音楽関連の合宿の受け入れをしていると教えていただき「納得！」と思わず口にするほどの広さで、大きな楽器を持つ演奏者や合唱団などの大人数でもゆとりを感じられるような空間となっています。



ダイニングを進むと、喫茶風のスペースがあります。なんとなく、人とのキヨリが縮まり、よりゆっくりお話ができそうな空間が広がります。こちらも大きな窓から太陽の光が差し、手入れのされたお庭を眺めながらティータイムを楽しむことができます。



●ペンションのお客さま

ペンションマジョリカ開業後の初めてのお客さまは、メセナホールで演奏を控えた方々だ

ったそう。演奏練習後には、ペンション奥さま手づくりのケーキとお茶でひと休憩。現在は、楽器の練習や演奏会のほかに、コーラスの方々も。さらに、音楽関係の大人の合宿だけではなく、子どもの合宿も。まさに、老若男女問わないペンションです。

また、須坂市出身のおふたりだからこそこの想いも。オーナーは、お仕事で峰の原高原に来たことがあったそうですが、奥さまはスキーや上田に行く通り道くらいの印象だったそう。その経験があるからこそ、地元の方に、ステキなこの場所へ、一度来てみてほしい、と。

「須坂市街にお住まいの方は、峰の原高原までの道を“怖い”と思っているの。“今は整備されているのよ”とお伝えしたい。ただ、それでも、自分で運転して上がるには大変だと感じる方はいます。だから、一週間に一本でも、峰の原高原行きのバスがあれば、と思うの」

●峰の原高原への想い

「ここは、リラックスしすぎるくらいに煩わしさが無い」とオーナーさん。

「儲けるというよりは、食べていければいいの、暮らしが楽しければ」と奥さま。

隣とちょうどよいキョリ感があり、勤めていた頃にはなかった昼間のお付き合いがありません。

ペンションもお庭もこの景色に似合うようなものを考える。自然を愛し、今の暮らしを楽しまれています。

●おわりに

ペンション内にいる、さまざまなマジョ。このマジョたちの中にはお客さまから“ペンションに似合いそう”とプレゼントとしていただいたものもあるのだとか。オーナーさんとお客さまのキョリが近いペンションらしいエピソード。

また、別棟の『マジョカフェ空飛ぶほうき』、須坂市の「どこでも図書館」にもなっている『絵本やまのおうち』、グリーンシーズンにオープンガーデンの一つとなる『ファンタジックガーデン』。どれもペンションマジョリかしさを感じることができます。

ぜひ、おふたりの人柄とともに楽しみください。



～*～*～*～*～*～
ペンション マジョリカ
<https://www.majolica.jp/>
～*～*～*～*～*～

<お知らせ>

2020年2月22日（土）～23日（日）にかけて峰の原高原で冬の雪上運動会を予定しています。

こちらの様子もどこかでご紹介できればと思います。

ぜひ峰の原高原へお出かけください♪

（須坂市地域おこし協力隊 日下未夕）

No94 活動報告 / 地域おこし協力隊 成田あゆみ「3年間本当にありがとうございました。そして、これからもよろしくお願いいたします」

～退任にあたりこれまでの取り組みを振り返りました～

●協力隊を目指した理由と採用までの経過

私が地域おこし協力隊となったきっかけは都内で行われていた長野県の移住相談会でした。参加した理由としてはすぐに移住したいからということではなく、いつか住みたいからどんな市町村があるのか話を聞きに行こうかなといった軽い気持ちでした。しかし、会場でお会いした須坂市の職員の豊田さんに一度須坂市を見においで！と誘われたのと、豊洲地域公民館の山崎館長(当時)の豊洲地域への思いや協力隊に期待する役割などの話を聞いて興味がわき、一度豊洲を見てみたいという気持ちになりました。そこで豊洲を訪れ、市内を巡り、自然がとても身近な須坂市がとても気持ちよく、すぐに好きになりました。

そこで私はいつかしたいと思っていた移住、今現実に可能ならばいつかと言わず、このタイミングでもいいのか？しかも今なら移住して就職もできて住むところもある！良いことしかない！と考えました。

しかしそれまでの私は、長野県と言えば軽井沢が別荘地というくらいしか長野県のことを知らず、また地域おこし協力隊という制度についてもほとんど知りませんでした。そのため、こんなろくに知識もない私が地域おこしなどという大層なことができるのか、そして受け入れてもらえるのか、正直とても不安でした。それでも、移住相談会や個別相談会、そして須坂市内を案内してくれた皆さんが「気負わずに、出来ることからやってくれば良い」、「来てくれるだけでも地域活性だ！」といったいろんな温かい言葉をたくさんかけてくださったこともあり、不安はあるけれど挑戦してみようという前向きな気持ちになることが出来ました。そして副市長との緊張の面接を乗り切り、ついに、地域おこし協力隊として着任することになりました。



●採用されてからの思い出、感じたこと

私のもとに採用通知が届いたのは、活動開始日(2017年6月1日)のおよそ1か月前のことでした。これから暮らす住居の選定、引っ越しの手配、住民票の移動など、あれやこれやとしているうちにあっという間に1か月という時間が過ぎたように感じます。



何はともあれ、新天地。長野電鉄に乗った時に、なんと人生初のもぎりを体験(見学に来たときを除く)しました。切符は自動改札機に通すものだと思っていた私にとって、改札に駅員さんがいて切符にスタンプを押してもらうのはとても新鮮な体験でした。ちなみに私が乗ったのは偶然ですが「湯けむり号」でした。名所で電車が止まって景色の撮影が出来て、乗務員の方が案内する沿線の観光スポットや歴史、名産物に関する説明を聞きながら乗れる観光案内列車です。須坂に向かう景色を眺めながら、勝手ながらまるで長野県に歓迎されているような気持ちになり、うれしくなったのを覚えています。記念に車内販売でエリンギ寿司を買いました。



● 1日目、1か月、1年、2年、3年で感じたこと

これまで住んでいた千葉県とは違い、須坂市は5月下旬でも朝晩の冷え込みが厳しい時があるということを知りませんでした。私はそれまでの感覚で、布団は追々揃えようと夏のうす掛けしか持ってきていませんでした。しかし須坂市に来て1日目の夜、私は寒くて眠れず、夜遅くに駅前のスーパーまで布団を買いに行くはめになりました。後から聞いたのですが、この時期でも昼間は暖かく、朝晩が冷えるというのは須坂市ではたまにあることだと、コタツもまだ出してる家もあるのだと教えていただき、風土の違いにとても驚きました。

最初の1か月は、豊洲地域のとにかくいろんな所へ山崎館長(当時)が連れ出してくれて、公民館のサークルや講座への参加や、隣接する豊洲小学校と連携した信州型コミュニケーションスクールの活動など、色々な面からサポートしてくれました。そして1年目の締めくくりとして、公民館で成果発表会を3月に開催しました。これは豊洲地域の皆さんにより私のことを知っていただくため、あえて1年目で行いました。当日は目が回る忙しさでしたが、お越しいただいた皆さんに地域おこし協力隊としての活動や取り組みを紹介することが出来て、充実した成果発表会となりました。



2年目は様々な摘果りんごを使った加工品の試作をしました。さらに信州大学のゼミ生を招き、試作品や地域おこしについて商品化、ブランド化を含めた意見交換会など行い、摘果りんごを最も有効に活用できる加工品について模索していきました。自分とは違う、大学生の意見や視点が新鮮で、加工品の試作にとっても参考になりました。また、豊洲小学校との連携では、春の遠足や社会科の校外学習、月に1度の放課後のクラブ活動(料理クラブ)に参加しました。近頃は子どもと接する機会がなかったので最初は不慣れな部分や戸惑いも多くありました。しかし皆さん驚くほど素直で、興味津々で話しかけたりしてくれるので馴染むことができ、毎回とても楽しく授業に参加することができました。





そして3年目は2年目の試作をもとに摘果りんごをジュースに加工、商品化を目指し市場調査を行いました。そのために春から夏にかけ農作業に参加し、豊洲のりんご農家の土屋さんや吉池さんに協力していただいて摘果りんごを採取、加工しました。りんご畑は開放感があり、合間に世間話を挟みながらの作業はとても楽しい仕事でした。



●摘果りんごを活用した取り組みその1「ジャムあんこぱん」

摘果りんごを使った加工品として最初に思い浮かんだのはジャムでした。しかしジャムを試作してみたところ、未熟果のためペクチンや水分の含有量が少なく、粘度が出ずにやわらかくもならないのでうまくいきませんでした。そこで、このジャムもどきを活用するためにあんこに方向転換することになりました。あんこをおいしく食べるには何が良いかを考え、最初は王道の和菓子を作ってレシピ公開することを試みましたが、作るのに手間がかかるということで断念。つぎにパンに塗って食べたらどうかということになり試食。すると、摘果りんごジャムとパンの相性が良くとてもおいしかったので、あんこぱんにして販売できないか検討しました。けれど販路の確保など条件が難しかったのと、もっと手軽に摘果りんごを加工できるものが出てきたため、ジャムあんこパンは販売されることはありませんでした。



●摘果りんごを活用した取り組みその2「摘果りんごカレー」

摘果りんごカレーは偶然できた試作品でした。1年目に開催した成果発表会で、試作品の試食会も合わせて行うことになりましたが、試作品が甘いものばかりでしかもお腹にたまるものがありませんでした。そこで、1日かけて開催するのだから、お昼ご飯の代わりになるお腹にたまるものも用意しようという意見が出ました。そうして出来たのが摘果りんごカレーです。材料は摘果りんごとたまねぎとルーだけというシンプルなものでしたが、成果発表会では意外なことに大変好評でした。作るのもそこまで難しくなかったので、あんこ

パンと合わせて販売できないか検討しましたが、残念ながらあんこパン同様の理由で、販売には至りませんでした。



●摘果りんごを活用した取り組みその3「摘果りんごジュース」

様々な試作をするなかで、もっとシンプルに摘果りんごそのものの栄養を手軽に摂取することはできないかという意見が出るようになりました。それというのも摘果りんごと成熟りんごの比較成分分析の結果から、りんごの持つ総ポリフェノール量は、小さな実の未熟果のころから収穫を迎える大きな成熟果まで変化がなく、未熟果の方が効率よくポリフェノールを摂取できることが分かったからです。さらにポリフェノールは熱を加えることで変質する為、過度な熱を加えないジュースが適しているのではないかとということになりました。もちろんジュースに加工する際は加熱殺菌処理をしますが、出来上がった摘果りんごジュースの成分分析をしたところ、成熟果のジュースのおよそ2倍のポリフェノールを含んでいることが分かりました。そこで摘果りんごジュースを大量生産できるのか、出来たとして生産したジュースの需要を見込めるのか、アンケートを含めた市場調査を行うことにしました。

3年目の春から夏にかけて、ジュース加工のために豊洲の農家の土屋さんの協力を得て農作業を手伝いながら摘果りんごをつみとりました。重さにして約220kg、りんご箱12箱分の摘果りんごを集めることが出来ました。

摘み取った摘果りんごは長野県農村工業研究所で残留農薬検査を行い、安全性を確認したのち、加工しました。ジュースの加工は、加工場を持っている豊洲の農家の吉池さんに協力してもらい、手伝っていただきながらやり遂げました。こうして約220kgの摘果りんごから、150本(1ℓ/本)のジュースが出来ました。





ジュースが出来上がれば次に考えるものはジュースの顔ともいえるラベルです。豊洲らしさを考えながら自らデザインし、同じ協力隊(商業観光課所属)の宮島さんからもデザインを提供してもらいました。しかし、ラベル次第でジュースのイメージが決まってしまうと思うとなかなかデザインを絞ることが出来ず、結局ラベルもアンケートの対象にすることにしました。当初ラベルは表側の1枚だけでしたが、農村工業研究所職員のアドバイスを受け裏側のラベルも作成しました。成分表示や製造元といった販売する際に必要な表示もしっかり盛り込みました。ところが準備を進めていた最中の10月、台風19号により公

民館が床上浸水、保管していたジュースの1/3が水に浸かってしまいました。そのため、衛生面を考慮し水に浸かった分は廃棄することになりました。本数は減ってしまいましたが、残りの摘果りんごジュースは公民館の講座やサークル、協力隊として参加した県外の産直やマルシェ、移住相談会など様々な場所で試飲・アンケートに活用することが出来ました。

今年の2月に行われたふるさと信州須坂のつどいでは、参加者の皆さんのお土産としてアンケート付き摘果りんごジュースを用意することになり、在京の須坂市出身の方に摘果りんごジュースを広める良い機会となりました。アンケート調査の結果としてはおおむねさっぱりとした味が好評でした。また、ジュースのストーリー性が大切だというご意見や、首都圏やインターネット販売(デパートなどと提携)したらどうかといったアドバイスをいただき大変参考になりました。摘果りんごジュースは販売までは至りませんでしたが、こうした試飲やアンケート調査の結果、認知度を広め、工夫して販売すれば十分需要はあると感じます。



●スムージーレシピコンテストに参加

協力隊1年目の秋、須坂市健康づくり課のスムージーレシピコンテスト(第1回)に参加しないかと誘われ、応募、参加しました。ちょうど摘果りんごの残留農薬試験の結果が出たころでした。摘果りんごを使ったスムージーレシピを提出し予選を通過、本選は信州医療センター健康まつり内で行われるスムージーレシピコンテストで行われ、5分程度のスピーチをしなければなりませんでした。コンテストはこの健康まつり内で試飲ができる一般投票に加え、審査員が投票し、順位が決まるというシステムでした。スピーチは苦手ですが摘果りんごを広める絶好の機会と思い、心臓をドキドキさせながらもなんとかスムージーのPRをし、3位に入賞することが出来ました。実は本選出場が決まってからは、山崎館

長(当時)や北原主事を相手にひたすらスピーチの練習をしていました。2人相手でも緊張するのはたして本番は大丈夫かと不安になりましたが、1度話し始めれば練習のおかげか震えながらもすらすらと話すことが出来、ほっとしたのを覚えています。



●アグリ豊洲の会と江東区豊洲で産直

1年目からお世話になっていたのが、豊洲の農家の皆さんで結成した「アグリ豊洲の会」です。元々は豊洲という地名から、東京都江東区にある豊洲小学校の児童とお互いに交流したり、あちらの豊洲にある公園にりんごの木の植樹をしていた会だったそうです。しかし、児童数の変化や環境の変化などといった影響でだんだんと疎遠になりました。そして一時は途絶えた交流を数年前に復活させたのが、現在の会長である丸山さんです。現在は年に1度、10～11月頃に江東区の豊洲へ行き、こちらの豊洲で採れたりんごやぶどう、野菜、キノコなどを販売しています。毎年この時期に来ることを覚えてくださっている地元の方もいて、いつも予定の時間より早くに売り切れます。産直の場所は毎年同じ場所で、シエルタワーという豊洲駅前の複合施設です。その名の通り高層の建物でいつ見上げても圧倒されます。



私は豊洲のPRのために毎年参加させていただきました。産直では豊洲を紹介するチラシや掲示用のパネルを作り、当日は産直で使えるようにと作った揃いの半被を着て売り子をしていました。それに加え3年目は摘果りんごジュースを持参し、アグリ豊洲の会の皆さんにも試飲に協力してもらいました。産直ブースの一角に試飲コーナーを作り、買い物にきたお客さんにアンケートをお願いするというものです。試飲したお客さんはジュースも売っているものと思い、何度か購入したいというお声をいただきましたが、アンケート調査が目的だったので残念ながらお断りしました。しかし、こうして首都圏で購入意欲のある方がいることが分かったのは大きな収穫といえると感じました。





●消防団第5分団2部

消防団に入団するきっかけは、9月に行われる豊洲小学校運動会でした。そこに来賓として招待されていた5分団の分団長に紹介され、1年目の冬、入団するに至りました。入団して初めての行事はなんと出初式。事前に行進の練習はしましたが、右も左も分からぬまま、不安を残しつつラッパ隊員として参加することになりました。当然ラッパも吹けないので、曲に合わせて上げ下げするだけですが、慣れない姿勢だったこともあり、上げ下げのタイミングや歩幅がずれたりとても苦労しました。出初式にはこれまで3回参加しましたが、年に1度なので毎回似たようなことで苦労している気がします。





その後もこれまでの間、5分団のラッパ訓練に参加し、練習しました。一度は須坂市消防技術大会ラッパ吹奏の部へ出場したこともあります。練習は大変でしたが、終わった後の達成感は格別でした。その他にも年末の歳末夜警や訓練など消防団の活動に参加しました。おかげで少しは鍛えられたように思います。今春で協力隊は卒業しますが消防団には変わらず所属し、活動に参加していきたいと思います。



●南小河原町公民分館主事と組長

山崎館長(当時)曰く、住む町を知りたければ分館に携わろう！ということだったので、6月に協力隊として活動を始めたのと同時期に、南小河原町公民分館のお手伝いとして参加することになりました。手伝いとはいえ、当時は町のことは全く分からないよそ者です。仕事を教えたり、割り振りを变えたり負担が増えた部分があったと思います。それでも分館役員の皆さんはとても温かく迎えてくださいました。実際に行事に関わることで町の仕組みを理解し、区民の皆さんに顔を覚えてもらうことが出来ました。

次の年からは正式な分館主事として迎えていただきました。南小河原町は1年を通して行事が多く、夜の会議や休日のイベントの運営などやることはたくさんあり大変でしたが、終わってみると不思議で少し寂しいような気もします。さらに分館主事と合わせて隣組の組長の順番もまわってきました。そもそも隣組や回覧板といった仕組みを理解していなかった身としては、組長は未知のものでした。皆さん色々と教えてくださるのですが、なかなか理解が追い付かず苦労しました。それでも一つずつこなしていき、何とか次の方に組長を引き継ぐことが出来て安堵しています。一度経験したので、次に組長が回ってきたときにはもう少しスムーズにこなせるようになっていきたいです。



●りんご畑

地域おこし協力隊として活動するにあたって、私とりんご畑は切っても切れない関係だと思っています。摘果りんごの調査や採取など、豊洲のいろんな農家の皆さんに大変にお世話になりました。どの方も親切で「摘果りんごについて調べるなら」と、とても協力的でした。なかでも、1番初めに摘果りんごに協力してくれたのは当時豊洲地区の地域づくり推進委員だった上野原さんでした。上野原さんは多種多様な果樹を栽培し、りんごも人気の品種から珍しい品種まで様々栽培していました。そこで実際に畑へ行き、りんごについて

実物を見せながら丁寧に教えてくれました。摘果りんごの残留農薬検査にも協力してくださいました。おかげで摘果りんごが食べられるということが分かりました。地域おこし協力隊として、摘果りんごの活用法を探るうえで早い段階で食用に方向性を転じることが出来たのは、この検査と上野原さんの協力があったからだと思います。



●ジュース加工

摘果りんごを最初にジュースに加工したのは、2年目の9月長野市にある長野県工業技術総合センターでした。なぜこのような場所かといいますと、須坂市産業アドバイザーの西さんの紹介によるものです。西さんは私の地域おこし協力隊の活動に多方面から協力、アドバイスをしてくださり、その一つとしてジュースを加工できる場所を教えていただきました。当日は西さんも加工に参加して下さり、山崎館長(当時)と3人で、約30kgの摘果りんごを加工しました。この時は結果から言いますと失敗してしまったのですが、約18ℓのジュースが出来ました。理由としてはこの時使用した器具がりんご専用のものでなくトマト用の搾汁機だったことで、りんごの搾りかすが混入したからです。また、ジュースの加熱殺菌の際の温度管理がうまくできず、成分分析の結果総ポリフェノールがほとんど検出されませんでした。思うような検査結果が得られなかったため、失敗を踏まえもう一度少量のジュースを加工し検査しました。すると、正しく加工すれば総ポリフェノールは期待通り検出されることが分かり、この結果をもとにジュースの大量生産をすることが決まりました。



●公民館とわたし

私は公民館に配属された協力隊員です。そのため、自身の活動に加え、公民館の講座やサークルに参加することが多くありました。時には講座を担当したり、同じ協力隊(当時スポーツ振興担当)の藤井さんとコラボ企画と称して長野ガロonzの選手を講師にソフトバレーボール教室を開催したりしました。自身の講座では調理師資格を生かし、クリスマス前の時期だったのでシュトーレンを作りました。講師は緊張しましたが、参加した皆さんからはご好評いただき、喜んでもらったのがうれしかったです。さらに後日もう一度自分で作ったと言って持ってきてくださった方もいて驚きました。



ソフトバレーボール教室は7月の球技大会の前に開催したので、大会に出場する女性の皆さんがプロの技を覚えたいとたくさん来てくださいました。皆さん真剣に準備運動から簡単な練習試合まで参加していただき、アンケートにはまたやってほしい、楽しかったとい

った好意的な意見が多かったです。1回目が好評だったので、その後も長野ガロンスの選手に講師をお願いして2回ほど開催しました。

他にも、公民館の隣には児童クラブがあるのですが、この2つの建物は渡り廊下でつながっています。そのため普段はもちろんのこと、特に長期休みともなれば公民館には子供たちが集まります。そこで、夏休みなどは子供向けの映画会や講座をたくさん行います。私は児童クラブの先生と子供たちが作るカレーをいただいたり、子供たちと遊んだりする交流が楽しみでした。公民館に係る事業にはおおむね参加したと思います。そこで私を含め協力隊について知ってもらうことも多かったですし、ご縁が出来てサークルやクラブに参加したりしました。公民館に所属していた協力隊だからこそできた経験がたくさんあるとわたしは思います。



●最後に

これまで私の活動に協力してくれた皆さん、ここに書ききることはできませんでしたがたくさんいらっしゃいます。支えていただき本当にありがとうございました。千葉県から1人移住し、当初は正直、不安や寂しさが強くありました。それでも日々の生活や活動をしていくうちにいつしかそんな気持ちを感じることはなくなっていました。この土地になじむことが出来たのは公民館をはじめ、地域の皆さんが温かく見守ってくださったからだと思います。

たくさんの出会いがあり、他では得ることのない様々な経験を積ませていただくことができて、私にとってかけがえのない財産となりました。ここで地域おこし協力隊は卒業しますが、これからも須坂市の一市民として変わらず生活していきますので、見かけたら声をかけてください。3年間本当にありがとうございました。そして、これからもよろしくお願いします。

(須坂市地域おこし協力隊 成田あゆみ)

No95 活動報告 / 須坂市地域おこし協力隊 古川広野「峰の原高原地域おこし協力隊を退任します」

須坂市峰の原高原地域おこし協力隊の古川です。2018年4月から峰の原高原で活動をはじめ、およそ2年が経ちました。この度、私古川は2020年4月から峰の原高原のペンションの経営などに専念し、協力隊を退任することとなりました。今回のメルマガでは私の峰の

原高原における地域おこし協力隊の活動とその中で感じたことなどをお伝えさせていただきます。

●Uターン

私は、地域おこし協力隊の制度を利用し、大学卒業後、地元に戻りました。偶然私が制度上可能な条件を満たしていたため、選択肢として考えることが出来ました。これは運が良かったです。

須坂市、峰の原高原は、ペンション村として、観光地とうたってはいるが、現実はどうなんだろうか。今でこそなんとなく分かってきましたが、当初は何も知りませんでした。それでも人口減少、高齢化などなど、今どこどこにでもあるような問題に直面しているであろうことは容易に予想できます。きっとそれは、私一人が帰ったことで解決できるものではないとは分かっていました。しかし、私は実家がペンションだったこともあり、両親がペンション経営をしている姿を見ていました。元々内部から見ていた、勝手の知った場所。そこに協力隊の制度で入りこみ、将来を考えながら地域のことと考えられるならば、利用してみよう。そんな思いから、私は須坂市峰の原高原地域おこし協力隊の制度を活用しようと決めました。

なにより、私は地元が好きでした。それだけです。



●峰の原高原

峰の原高原は、50年ほどの歴史がある標高1500メートルのペンション村です。「ペンション村」なんです。言い方は少し悪くなっていますが、お金が落ちる場所がペンションくらいしかないんです。要するに、日帰りのお客さんの場合、お金が地域に落ちにくいのです。かつて夏はテニス、冬はスキーのお客さんが日帰りの方もそこそこいたそうですが、現在はかなり少なくなっているようでした。ちょうど私が峰の原高原に戻った年、今まで峰の原高原スキー場を経営していたところが撤退しました。現在に至るまで、スキー場に関しては紆余曲折あったのですがここでは省略します。とにかくかつてはメインと言えるほど多かったらしいスキーのお客さんも減ってきているなかで、地域としてどのようなことが出来るのかはいまだに課題として残っています。ペンションの数は最盛期に比べるとおよそ半分。あと10年、20年経ったときに、どうなっているのでしょうか。不安もありますが、近年は私のように協力隊を入れたり移住される方がいたり、期待もあります。



●地域おこし協力隊

地域おこし協力隊とは、実際は人を指すのではなく、制度を指す言葉です。私はその制度を利用して移住（Uターン）してきた隊員というわけです。各市町村によって、移住してきた協力隊員が何をやるのかは様々です。私の場合は、いわゆるフリーミッション型で、地域の中で観光協会を手伝いながら将来を考えつつ働く、といったような感じでした。

●活動

地域おこし協力隊を始めたとき、活動内容として考えていたものは、「情報発信」「オリジナルグッズ製作」「ペンション業務」などを考えていました。

そもそも峰の原高原観光協会はペンションオーナーたちを中心に地域の住民で役割を担っている任意団体でした。専念できる人がいない、というのが大きな問題です。ペンション業の片手間に情報発信ができるかという、やはりどうしても厳しいらしくなかなかできていないというのが現状でした。そんな背景もあり、観光協会からは情報発信はどんどんやってほしい、と聞かされていました。私自身やったほうが良いとは思っていたこともあり、活動の一つとして情報発信業務を行ってきました。情報発信ツールとして管理しているSNSは、Facebook、Twitter、Instagramなどです。2019年に入り、YouTubeなども行ってきました。私は主にTwitterを利用しています。どのSNSも、メリットとデメリットがあるとは思いますが、より広い範囲の人に向けて情報発信を目指すならTwitterが向いていました。（あくまで私の使い方の場合に限った話ではありますが。）

★峰の原高原観光協会Twitter

<https://twitter.com/minenohara>

★峰の原高原観光協会Instagram

https://www.instagram.com/suzaka_minenohara



「情報」の取り扱いはとても難しいです。というのも、私の世代は「インターネット上に個人情報を書いてはいけません！」「顔写真なんて絶対ダメです！」「人の顔が写っている写真を勝手にインターネットにあげると裁判になる可能性もあります！絶対だめ！」と教わってきた世代です。インターネットやSNSをめぐり、様々なトラブルに巻き込まれてきた世代、というわけです。しかし、「観光協会での情報発信」となると、たとえばイベントごとなどでは外部からも参加してくれる方がいらっしゃるわけです。記念にはいい、チーズ。よくあるシーンですよね。さて、ここで撮った写真はSNSで情報発信として使用してもいいのでしょうか。名前は伏せますが、とある自治体ではこういった写真をSNS上に載せたところ、勝手に載せられるなんて聞いてない、といったようなクレームが来たという事例も少なくありません。今どきこんなこと気にしている方が正直少ないとは思いますが、前例がある以上避けられるリスクは避けるべきですよね。しかしそういったことに関して、「気にしない人が多い」ということに一番苦労しました。「大丈夫大丈夫～」という感じです。おおらかで大変ありがたいのですが、撮影とSNS掲載の可能性をお伝えしてからイベントや撮影を行うようにしました。これは峰の高原観光協会が任意団体だからということもあります。例えばテレビや新聞など、報道関係や行政の資料などの場合はもし許可がなかったとしても問題ないそうなのですが、個人や任意団体となると話が違ってきます。背景の一部とみなせるような単なる映り込み場合は問題なかったり、それでも顔が明確にわかってしまう場合は問題になることもあったり…と事例は様々です。要するに人が写っている場合は許可を得ておいた方が無難ということです。「地域おこし協力隊」として考えると須坂市の嘱託職員と見られるのですが、私の場合厳密には「峰の高原観光協会所属」になっていたため、微妙な立場でした。なのでかなり気を付けたつもりです。それでも時には問題がどこかに隠れているかもしれない。自分から世界に向けて発信する情報の中に問題が潜んでいるとしたら、怖いですよね。簡単に情報発信とはいいますが、意外と壁だらけであったことに気づき、苦戦しました。…正直今の時代、「そんなに気にしなくても問題ないだろう」というのが現実な気もしますが。何が正しいのかはもうわかりません。

私は私個人の、須坂市や峰の高原高原とは何の関係もないただの古川広野としてのアカウントでの情報発信も行っていました。

<https://twitter.com/coopemine18>

観光協会ではなく協力隊個人としての活動も発信するという目的がありましたが、あくまで個人的なものという扱いでした。また、これならばイベント毎の宣伝をし、もし何か問題があったとしても私個人の責任として受け止めればいだけで済みます。個人と団体のアカウントを使い分けることはメリットが大きかったです。

余談ですが、須坂市の人はなぜかFacebookユーザーが圧倒的に多いという印象を持ちました。世代的な要因もあるのかもしれませんが、ほかの自治体と比べても多いように感じました。なぜでしょう。不思議ですね。

情報発信をしていく中で、峰の原高原の景色の魅力に気付きました。昔住んでいたころは、当たり前すぎて全く気にしなかったです。小さい頃から住んでいたのも、夕陽は見えて当たりまえだし、夜外に出れば星は見える。天の川も別に普通に見られる。流れ星も普通。花はきれいに咲いているし、冬になれば樹氷が見られる。本当に、普通でした。どれもこれも日常の中で見られる景色だし、絵本にだって星空や夕陽はだいたい同じように描いてあるから、「まあそういうものなのだろう」という感じでした。都会では星空は見にくい、といったようなことを頭では理解していても実感がありませんでした。

大学を機に峰の原高原を離れたことで、魅力に気付けるようになりました。景色が良いと気づいてからはカメラを持ち歩き、シャッターを切るようになりました。写真はやればやるほど奥が深く難しいものでしたが、撮った写真を発信していくなかで峰の原高原に興味を持ってくれる人が出てきました。百聞は一見に如かず、ですね。情報発信においても写真というのは大変有用なツールでした。少しずつ写真を撮るのにも慣れてきて、何度か写真を展示したり、フォトブックを製作したりしました。最近だとコンテンツワークス様主催の「ジモトジマンコレクション」という企画に、峰の原高原の冊子を作成し、応募したところ、「もの部門」に入賞いたしました。本当にありがたいです。

★「ジモトジマンコレクション」もの部門入賞！

<https://www.contentsworks.co.jp/2020/4thresultannouncement>

協力隊の活動の中でも写真を撮ってきて、その中でも気に入った写真をまとめ、冊子にしたものでした。自分がUターンしたことで見えるようになった景色を、素直に冊子にまとめたものがこういった形で選んでいただけたことがとても嬉しいです。

作成した冊子はweb上でも見ることが出来ますので、お時間のある方はぜひ見ていただくと嬉しいです。

★フォトブック「自然の中で」

<https://www.memepaper.jp/MEME-7254762001281550470>



また別の発信方法として、SNSやYoutubeなどに掲載する短い動画を活動の中で作り、発信も行っていました。市内でも「動画みたよ」などと声をかけていただけたことがあり、とても嬉しかったです。

★Youtubeチャンネル

<https://www.youtube.com/channel/UCuzY28MzLX35yp7-xIXr5kQ>

●グッズ制作

須坂市内にあるレーザー加工機を利用し、峰の原高原オリジナルグッズの制作なども行いました。初めの頃は機械の使い方も全くわからず苦戦してばかりでしたが、丁寧に教えていただきながらなんとか使えるようになりました。試行錯誤を繰り返しながら峰の原高原に昔から居たマスコットキャラクターのMr.ヌーキーのキーホルダーを制作していました。色々なイベントなどで販売したり参加賞としてお渡したりする中で、知られていなかっただけで結構人気がある事を知りました。失礼ですが、意外でした…。Mr.ヌーキー、すごかったんだなあ…。レーザー加工が利用できるのにストラップくらいしか作らないのも正直もったいないと思うのですが、加工時間と費用などを考えると一番製作しやすいのがやはりストラップ、キーホルダーの類でした。なかなか単価を抑えられないのが悩みではありますが、製作したキーホルダーを喜んでくれたり、ぼろぼろになるまでつけていてくれたりするのを見ると、かなり嬉しいです。

今年度に入り、Tシャツやパーカーなども製作しました。やっぱりここでもヌーキーは人気なようです。



活動の中で、峰の原高原にはファンがいる、ということをよく感じました。例えば、グッズを見てくれたり、買ってくれたりする人の中には昔から峰の原高原を知っているような、またはペンションによく泊ってくれているような方がとても多いです。様々なイベント毎などでも、峰の原やペンションさん毎のリピーターがとても多かったです。お客さんからも愛されている地域、というのは素敵なことだと思います。それは今まで峰の原高原に暮らしていた方々が、地域と人を大切にしてきたからだだと思います。

●今後と将来

冒頭にも書きましたが、今後私は須坂市峰の原高原でペンション経営を行います。協力隊の活動の中でいろいろ考えはしましたが、やはり峰の原高原という場所で選べる職業は少なく、宿泊業は今の私の状況を考えると一番現実的でした。情報発信は大事ですし、地域に必要なことであるとも考えられます。しかしなかなかお金にならないのが現実でした。峰の原高原観光協会はいくまで任意団体であり、現段階では人を雇うということは考えられませんでした。そうすると、この場所で生計を立てる手段としてはやっぱりペンションなのだと思います。

この2年間、短い期間ではありましたが今までとは違う目線でペンション業という仕事に触れました。日本におけるペンションは、ヨーロッパから入ってきた「ペンション」という宿泊形態が日本独自のスタイルに変化したものです。ホテルや旅館などの宿泊業とは少し異なる、「日本でのペンション」という形式。峰の原は其中でもさらに特殊な経営をしているかもしれません。オーナーとお客さんの距離感は、ホテルとも、ゲストハウスとも異なる特有のもの。言葉では説明しきれない独特のものがあると考えられます。お客さんとオーナーが対話したりすることで生まれる距離なのだと思います。

また現在の峰の原高原の場合、夏は学生の合宿が多いです。学生にとって、夏の合宿は一大イベント。もちろん遊びできているわけではありませんが、思い出には残るものだと思います。私自身学生の頃に行った合宿などはよく覚えています。良くも悪くも「特別」なわけです。学生にとって最後の合宿の年、泣いている学生がいることもあります。そんな思い出に残るひとつの場所としてペンションを提供できることが、すごく不思議なことに感じました。学生が泣いている理由はわかりませんが、少なくとも感情になにかしらの変化があったためでしょう。その涙の理由のなかに、「ペンションの思い出」が良いものとして含まれていたら、とてもありがたく、嬉しいことだと感じました。もちろん合宿以外のお客さんにも、そんな素敵な思い出を提供できるようなペンションを作りたいと思うようになりました。そんなこともあって、ペンション業は強く興味の魅かれるものになり、この峰の原高原でなら頑張りたいと思えました。もちろんペンション経営は簡単なものではないと思います。それに、今後5年、10年と経った時にはペンションの数は減ってしまっているかもしれません。それでも峰の原高原の「ペンション村」という文化を少しでも維持できるよう、努力いたします。

この2年間、須坂市内の方をはじめとし、多くの方に大変お世話になりました。この場を借りて御礼申し上げます。



(須坂市地域おこし協力隊 古川広野)

No97 長野県飯田市出身で埼玉県から移住しました / 2020年4月着任！須坂市地域おこし協力隊の鎌倉美恵子です

はじめまして2020年4月1日から須坂市商業観光課所属の地域おこし協力隊として活動をはじめました鎌倉美恵子(かまくらみえこ 41歳)です。

須坂に移住した理由や、これからしていきたい仕事の事などを書きたいと思います。

◆経歴を簡単に紹介します

長野県飯田市(旧下伊那郡)で生まれ育ちました。



周りには山しかない場所で中学校まで暮らし、高校は市内の高校だった為一人暮らしが始まりました。

高校を卒業後東京の会社へ就職しました。

アミューズメントパークを経営している会社で接客から店舗経営、イベントの立て方、集客方法、ポスターデザインなど色々な事を学びました。

その後小学校の頃から興味があった建築の仕事をするために意匠設計の設計事務所でアルバイトをしながら、CADの資格を取得し、大手ハウスメーカーへ転職をしました。

設計課で確認申請業務とインテリアコーディネーター業務を経験し、出産後リフォームアドバイザーとしてリフォームの世界へ足を踏み入れ12年が経ちました。

◆移住のきっかけ

上の子がスノーボードを本格的にやりはじめ、長野に来る機会が増えて少しずつ移住の方向に進んできました。

- ・埼玉にいるより長野にいる時間が長くなってきた事
- ・長野に友達が沢山出来た事
- ・子供達が自然で遊ぶ事が好きな事
- ・いずれは長野に帰ろうと思っていた事

実家の南信もちろん検討しましたが、やはりゲレンデの近い北信がいいということになり、体験施設などを利用し夏休みと冬休みを長野で長期間過ごしてみました。最終的に須坂か信濃町のどちらかというところまで決まるのに4年くらいかかったと思います。



2018年冬、2019年夏の峰の原

◆須坂に移住を決めた理由

地域おこし協力隊の町なかリノベーションのチラシを見つけたことが大きなきっかけとなりました。

ハウスメーカー勤務の時に空き家調査や空き家対策のプロジェクトに携わりました。その物件だけでなく、オーナー様、不動産、工事店、組合の方、近所の方色んな方にお世話になり一つの物が形となって街の中に残り、利用される。

暗かった場所が明るくなったり、ゴミが散乱することもなくなったり
何より人の動きがそこに生まれると街の中も変わります。
とてもやりがいのある仕事でしたし、楽しかったのでいつか戻りたいと思っていました。

最初に問い合わせをしたのは去年の5月でした。
須坂の空き家の現状や、空き家をリノベーションして利用している店舗などを商業観光課
の寺沢さんと地域おこし協力隊の宮島さんに案内してもらいました。
その後もメールなどで相談をさせて頂き今年の3月に面接に至り、採用して頂きました。

◆地域おこし協力隊としてこれからしていきたい事

- ・空き家をなんとかしたいけど、どうしたらいいかわからない方
- ・空き家になっているけど何も考えていない方
- ・まだ店舗をやっているけど跡取りがいないのでどうしようか悩んでいる方
- ・ゴミの処理に困っている方

家の中の事なので相談しにくいと思いますが、時間をかけて小さな事から取り組んで行きたいと思っています。
また須坂へ移住を検討している方のお家探しや、店舗探しなど気軽に相談できるような場所を提供していきたいと考えています。

須坂の魅力ある街並みを維持しながら地域が活性化されるよう尽力したいと思います。

◆須坂へ引っ越して

毎年臥竜公園の桜を見に行っていますが、今年も少しだけ散歩に行って来ました。
ライトアップはありませんが、夕日に照らされてとても綺麗でした。
子供達のお気に入りには百々川緑地です、綺麗に整備された緑地と綺麗な水、広い空
ぼーっとしているとあっという間に半日終わってしまいそうです。

空き家情報だけでなく、家族で楽しめる須坂も紹介していけたらいいなと思っています！





(須坂市地域おこし協力隊 鎌倉美恵子)

No96 ペンションってこんなところVol.3『ペンションのいちご』 / 須坂市 地域おこし協力隊 日下未夕の「峰の原高原へお出かけください♪」 vol.6

こんにちは。峰の原高原地域おこし協力隊の日下です。峰の原高原では、4月に入っても半日で40cm近くの雪が降り積もる日があります。まだまだ冬を感じる反面、フクジュソウやクロッカスが顔を出し、少しずつ春の訪れも感じるこの頃です。



今回もペンションオーナーさんやオーナー夫人と話して感じた 『ペンションてこんなところ』

ろ"を紹介します。第3弾は『ペンションのいちご』さんです。

●開業の経緯

ペンションのいちごのオーナーご夫婦は、奈良県から須坂市峰の原高原に移住され、1979年に開業されました。スキーにゴルフ、釣りに木工など多様なご趣味をお持ちのオーナー。スキー検定一級を持つオーナーから「ペンションをやろう!」という話が出て、いくつかペンション村を見て回り、初めて訪れた際にきれいに見えた北アルプスの景色に惚れて「峰の原高原にしよう」と決めたそう。オーナーのスキー仲間でペンションを経営している方がいたこともあり、いつかはペンションをやるだろう…と感じていたという奥さまと、のちに「のいちご」の名付け親となる娘さん、そして息子さんの四人で移住されました。



●ペンションの様子

玄関には季節ごとに変えるという奥さま手作りのシャドーボックスやプリザーブドフラワーなどが並びます。また、カントリー調のドレッサーは出かける前にちょっと身だしなみをチェックのできる嬉しいポイント。



ダイニングに進むと白を基調とした空間に様々な大きさ・種類の雑貨が床から天井まで次々と目に入ります。一段区切られた空間には暖炉とソファが並び、広々とゆったり過ごすことができるスペースが広がります。





●ペンションの奥さま

大阪府出身で、とても穏やかな話し方と落ち着きのある佇まいをお持ちの奥さま。オーナーに負けない多趣味です。ペンションを始める前から生花やドライフラワー作りが大好きだったそうで、

「どうしてもプリザーブドフラワーをやってみたくて近くの教室を探したのよ」

と、ペンションを始めてからはプリザーブドフラワー作りも始められたそう。その他にも、峰の原高原内にあるモノを使ってリース作りをされたり、シャドーボックス（各パーツを何層にも切り重ねることによりできる立体感のあるハンドクラフト）作りをされたりと、ペンション内は奥さまの手作り雑貨であふれています。

また、海外旅行が大好きで、ヨーロッパ諸国をはじめとする十か国近く旅をされたそう。

「ペンション業は閑散期があるから海外旅行に行くことができるじゃない。これが楽しみなの」

と、旅行をした際に時間があればその土地の雑貨屋さんやアンティークショップに立ち寄り見つけてくるといふアンティーク雑貨たちもペンションに並びます。ちなみに旅行中に見つけた木の実などもつい拾ってしまうそうです。



「ペンション業を始めてからお料理を習いに通ったのよ。もう20年以上！」

そんなのいちごのお料理は、全て手作りのコース料理。宿泊した方にお話を伺うと、「サツマイモのポタージュやお肉の付け合わせのお野菜など、こんなにおいしく食材の味を感じられたのは初めて！」と驚かれていました。



「若いころは時間があればスキーに行っていたけれど、今はなかなかそうはいかないわよね。でも、天気の良い日に近所を散歩するだけでも、同じように歩いてる人や近所のお宅

によってお話をすることができて良い場所。運動不足の解消にもなるわ」
雪のない時期には地域のハイキングクラブの仲間と山登りをしたりランチやお茶飲みをしたりと楽しみがあるそう。

「峰の原高原で暮らすのは大変なこともあるけれど、好きだから」

●おわりに

今年も須坂市オープンガーデン峰の原高原地区のお庭の一つになっている、のいちごさんのガーデン。峰の原高原は市街に比べて一か月ほど遅れて季節がやってきます。こだわりのガーデンを訪れてみてはいかがでしょうか。

～*～*～*～*～*～

ペンションのいちご

<http://noichigo.la.coocan.jp/>

～*～*～*～*～*～

(地域おこし協力隊 日下未夕)

アートを通じて内側から輝く女性を増やしたい / 須坂市地域おこし協力隊 宮島麻悠子の『須坂おもしろ人物記』 vol.8

こんにちは！地域おこし協力隊の宮島麻悠子です。
須坂で活躍している方へのリレーインタビュー。今回は「アート サロン グレイス」の笹岡理絵さんです。



宮島：アート サロン グレイスというサロンでパステルアート、クレイアート、ネイルアート教室を主宰している笹岡さん。もともとアートはお好きだったんですか？

笹岡さん：絵は好きだったんですが、線で絵を描くのは苦手でした。高校を卒業してからすぐ金融機関に勤めて、美術の専門教育なんてほとんど受けてないですから、描きたい・表現したい気持ちはあっても、どう描いたらいいのかわからなくて。そんな自分でも楽しめるアートはないかなと思って始めたのがパステルアートでした。色を塗った後に消して

描く技法があるのですが、消したものがアートになるのに感動してハマり、色々な先生に習いました。

宮島：ふんわりとしたタッチで優しい感じですね。パステルはどのような画材なのか？

笹岡さん：パステルはチョークのような感じですが、私はこれを削って粉状にし、指に塗って描いてるんですよ。本来はこういう使い方をするものではないのですが、誰でも簡単に描けるようにこのような手法を使っています。同じ色でも、使う人の体温や手の湿り気などによって発色が違うんですよ。



好きな色彩で描くパステルアートには癒しの効果も

宮島：面白いですね！しかしながら、今日持ってきていただいた猫の絵なんてすごいリアルですが、どうしても難しそうに見えます。

笹岡さん：これは写真をトレースしてから色を塗っているんですよ。デッサンなど絵の技術を向上させることより、「楽しむ」ことを目的としているので、とにかく誰でもトライできるやり方でやっています。

宮島：なるほど～。それなら楽しく挑戦できそうです。パステルアートの他にも、クレイアートやネイルアートも教えていらっしゃるようですが、アートサロン グレイスのコンセプトは何でしょう？

笹岡さん：「キラキラ女子を増やす」でしょうか（笑）自分が好きなことを心から楽しんで、内側から癒されてほしいと思っています。「子どもが大きくなっちゃったらどうしよ

う、私つまんなくなっちゃう」と心配する方は結構多いんですよ。子育てを一生懸命やってきた人ほど、他に趣味や生きがいが見当たらなくて、何を楽しみにして生きていったらいいかわからないと。

それで、色々な自分の楽しませ方をお伝えすると、みなさん本当に生き生きしてくる。例えば、ネイルは最近「オーガニックジェルネイル」という有害揮発性成分を含まず、オーガニックや身体に良い成分を配合した特殊なジェルネイルを取り入れているのですが、溶剤や化学物質が苦手な方にも好評です。指先は常に目に入るので、気に入った色・形にしておくとホルモンが活性化し、とても元気になるんですよ。

宮島：いくつになっても、おしゃれする・キレイにするのってテンション上がりますよね。

笹岡さん：そうそう（笑）私がやっている事は生活に絶対必要なものではないですけど、そういうものこそ生活を豊かにしてくれると思います。自分を楽しみ、大切にすることでお客さまが輝いていくのが一番嬉しいです！



宮島：自分の時間がなかなか取れない方にこそおすすめしたいですね。ちなみに、教室に通うのが難しい方向けにskypeを使ったオンラインレッスンも開催していますね。（zoomは現在休止中）

外出が厳しいご時世でもありますので、こういった取組みは助かりますね。

さて、たくさんお話いただきありがとうございました。次の方をご紹介いただけますか？

笹岡さん：アロマのみっちゃん、こと日台美知代（ひだいみちよ）さん。ご自身で綿花の栽培をしていて、それを使ったクラフト作りをしています。

宮島：面白そうな方ですね！というわけで次回のインタビューは日台美知代さんに決定しました。お楽しみに！！

◎アート サロン グレイス

長野県須坂市井上 須坂長野東インター近く

TEL 090-1869-5330

<https://salon-grace.jimdofree.com/>

E MAIL sasaoka@salon-grace.info

蔵のまち観光交流センターにて

「クレイアート」「パステルアート」の体験講座開催中

（TELまたはE MAILで要事前予約・料金500円）

★バックナンバーはこちらのサイト内でもご覧いただけます

The secrets of SUZAKA 信州・すずかのないしょ話

（須坂市地域おこし協力隊 宮島麻悠子）

No98 ペンションってこんなところVol.4『ペンションれり〜ふ』 / 須坂市地域おこし協力隊 日下未夕の「峰の原高原へお出かけください♪」 vol.7

こんにちは、峰の原高原地域おこし協力隊の日下です。

峰の原高原では、未だに雪が降り積もり、雪かきをする日がちらほらあります。しかし一方でカタクリの花芽も出てきて、だんだんと春を感じます。



今回もペンションオーナーやオーナー夫人と話して感じた“このペンションってこんなところ”を紹介します。第4弾は『ペンションれり〜ふ』さんです。

●移住の経緯

ペンションれり〜ふのオーナーご夫妻は、東京都から須崎市峰の原高原に移住され、1984年7月に開業されました。代々木で飲食店をされていたご夫妻。人を雇わず夫婦二人でできる商売をゆとりのある環境でしたいと考えていた時に、タイミングよく峰の原高原とペンションの話を耳にしたそう。そこで実際に峰の原高原のペンションに宿泊し、自分たちの趣味とも合致したため「ペンションをやろう！」と決心されました。ご夫妻でテニスやスキーに菅平高原を訪れていましたが、「菅平の上にこんなところがあるとは想像だにできなかったわよ」とオーナー夫人は語ります。オーナーとご夫人、そして当時小学生だった息子さんの三人で移住をされました。



●ペンションの様子

優しい水色のペンションねり〜ふ。玄関を抜けてリビングの扉を開けると一番に目に入るのが壁一面のお手紙やポストカード。宿泊されたお客さまやお孫さんがプレゼントしてくれたものだそう。ホテルや旅館とは違う、ペンションならではのあたたかさを感じます。槍ヶ岳が大好きなオーナー。峰の原高原とペンションの位置を決めた理由という「居ながらにして北アルプスの眺め」を味わえるリビング。現在はペンションや木々で一階からは望むことができませんが、二階の客室からはばっちり望むことができます。



ダイニングにはテレビを囲むようにソファがあり、客室にテレビがない分、ここに集まってペンションならではの時間を過ごすことができます。また、写真を撮ることが好きなオーナー。ペンションのいたるところに山の写真が飾ってあります。ちなみに、峰の原高原の一大イベント、「槍に刺さる夕陽（槍ヶ岳に夕日が刺さっているように見える光景）」も槍ヶ岳が大好きなオーナーが発起人となり、現在のイベントに至ります。



●ペンションオーナー

高校生の頃からレタリングデザイン彫刻（イニシャルを組み合わせたデザインをつくり、金属に彫ること）の職人としてアクセサリーやカップに英字を彫っていたオーナー。ペンションを始めてからも受注しており、時には結婚式の引き出物にとレタリングの施されたカップを約50個、スキーシーズンに注文を受けたこともあったそう。とても神経を使う作業で危険を伴うため、歳を経て辞められています。ペンションには作品がいくつか飾られています。



●ペンションについて

「ペンションの楽しみの一つ、食事。お料理は元々好きですか？」

—「お料理は元々嫌いではないけれど、どっぷり好き、というわけでもないわ」

そんなれり〜ふのお料理はできたものを使用しない、とにもかくにも手作りのお料理。年を取り少しずつつきつくなっているそうですが、「食事を食べたくて何度も来てくださるリピーターさんがいるからね。手は抜けないのよ」と笑顔でおっしゃっていました。



「ペンションれり～ふのこれからは？」

—「元気なうちは続けます。」

スキー人口の減少、そして東日本大震災以降、お客さまが大幅に減少したそう。実際に現在から四年前にペンションを辞めようと考え、お客さまに辞める旨を記した案内を出したそう。その際に「辞めないで！」や「病気？」という声が多くあったため、元気なうちは続けようと決めたそうです。

●峰の原高原について

「峰の原高原の魅力は？」

—「峰の原の魅力はやはり自然ですね。来た時から変わらず、魅力ですよ」

「MiNe（マイン）」という峰の原高原の自然や景観を守るための団体にも所属するオーナー夫人。峰の原高原の自然は人が手入れをするから魅力があり続け、お客さまが来てくださる。「年を取ってきて、環境整備を変わらず続けることができるかが不安だわ。若い時は考えもしなかったけれど」

また、「峰の原の住人は移住者であり、同業者。だからこそ、お互いの気持ちが分かり、助け合うことができる魅力をもつ地域ですよ」と教えていただきました。

「峰の原高原の暮らしで必要なことは？」

—「峰の原が好きであることが大前提ですね。あとは健康であること、山道や雪道を運転できること、そして収入があることです」

人と接することが好きだからペンションを続けることができ、何より峰の原高原が好きだからここで暮らしている、と。

●おわりに

開業当初、お客さまからの「やってみたい！」という声から始まり恒例となったお庭でのかまくら作り。昨年度は暖冬で初めて叶いませんでした、今年こそは！と意気込んでいらっしゃいます。かまくらを作りたい方、かまくらで過ごしてみたい方どちらも大歓迎とのこと。ぜひ来冬はペンションれり〜ふに訪れてみてはいかがでしょうか。



(須坂市地域おこし協力隊 日下未夕)

南館のリニューアルオープンをお楽しみに！ / 須坂市地域おこし協力隊 早川航紀の「須坂温泉古城荘の新たなスタートに向けて」vol.8

地域おこし協力隊の早川航紀です。私が活動の拠点を置く、須坂温泉古城荘もコロナウィルスの影響で休館という苦渋の決断を迫られることになりました。前代未聞の事態の中、ウィルス拡散防止を第一優先として5月末日までの期間、宿泊だけでなくランチや日帰り温泉も含めた完全休館とさせていただくことになりました。

このような状況ではございますが、前を向いて新たなスタートに向けて準備をしておりますので、今回はその活動と、リニューアルオープンする須坂温泉の新たな魅力についてお伝えできればと思います。

●合宿の子供たち用布団干し！

須坂温泉古城荘は一般の宿泊だけでなく、体育館や大広間、送迎バスを有していることで

長年スポーツの合宿施設として利用いただけてきました。春休み、GWに予定されていた合宿もちろん中止。次の団体様が気持ちよく使えるよう、合宿が入ったと思って布団干しを実施しました！

●館内、施設内の大掃除、修繕！

365日年中無休で営業している須坂温泉。日々の清掃はしつつもどうしてもお客様がいるとできない場所も…休館の間に日頃手の届かない場所まで大掃除を決行しました！特に浴場の天井は50年の年季を感じさせないほどピカピカに。より気持ちよく入浴してもらえるよう一生懸命磨きました。

●「湯の庭」の池の水全部抜く大作戦

須坂市オープンガーデンにも掲載されている須坂温泉自慢の「湯の庭」。こんな時しかできない大がかりな清掃をしよう！ということで池の水を抜きました。3密を避ける為、少数精鋭で、地元の有志の方のご協力もいただき、池の水を入れ替えました。大きい池なので数回に分けて綺麗にしていきます！



地元の方がポンプも貸してくれました



入れ替える水もちろん温泉です

●「湯の庭」を癒しの和の空間に

地域団体「大谷町花の会」の協力のもと、地元の竹を使い、須坂温泉の庭に竹柵を設置しました！日陰パラソルも置いて、より一層風流な庭園に変身する予定です。須坂温泉にお越しの際には是非、「湯の庭」をご覧ください！



車道が隠れて庭が独立した空間に



竹柵の材料は地元の竹藪から調達



地域の方のお知恵を借りて柵づくり

●大広間の漫画スペースが充実

ランチの提供や休憩場の開放など、日帰り温泉ご利用のお客様がのんびり過ごせる施設にしたいと徐々にではありますがサービスを拡充してきました。この度休憩スペース場に漫画コーナーを設置。日帰り温泉ご利用のお客様も、宿泊してお部屋でのんびり読書をしたお客様にもお楽しみいただけます。



●南館のリニューアル

須坂温泉で一番歴史の長い建物「南館」の耐震工事が終わりました。よりゆったりと安心してお過ごしいただける空間ができました。長期滞在の方や多様化する食のスタイルに対応できるようキッチンスペースを新設し、食のバリアフリーへの対応が可能になりました！



●須坂温泉古城荘 再開に向けて

まだ誰もその時期を予想できないことではございますが、状況が落ち着いたら今まで以上に市民や市外のお客様に愛される施設になるようスタッフ一同熱意をもって準備を進めております。



リニューアルした南館からの風景

●外出自粛なので山へ、畑へ

豊かな自然に囲まれた須坂市においては外出自粛となっても須坂温泉を出て畑や山での地域活動が山ほどあります。町から気軽に登れる山「坂田山」も緑が茂ってきました。

昨年からの耕作放棄地対策として栽培普及をしている信州産ソルガムも今年は須坂市での栽培面積が大幅に増えます！



豊丘地区の畑の様子

豊丘地区にある「離山」に今後アスレチックの遊び場ができるということで間伐された木を活用した薪づくりをしました。



移住して約2年。日に日に愛着が湧き、掘っても掘っても魅力の尽きないこの地域の素晴らしさを今後も須坂温泉から発信していきます！

須坂温泉古城荘 公式ホームページ

<https://kojousou.co.jp/>

(須坂市地域おこし協力隊 早川航紀)

No99 ペンションってこんなところVol.5『山の宿 木まま』 / 須坂市地域おこし協力隊 日下未夕の「峰の原高原へお出かけください♪」vol.8

こんにちは、峰の原高原地域おこし協力隊の日下です。峰の原高原では、カタクリやウスバサイシンなど続々とお花が咲き始め、メイン道路沿いの桜もついに見頃を迎えました。



今回もペンションオーナーやオーナー夫人と話して感じた“このペンションってこんなところ”を紹介します。第5弾は『山の宿 木まま』さんです。

●移住の経緯

木ままのオーナーご夫妻は、千葉県船橋市から須坂市峰の原高原に移住され、1992年2月に開業されました。学生時代に宿泊したペンションの居心地の良さ、スタッフの対応の良さ、そしてペンションオーナーの生き方に憧れを抱き続けたオーナー。一度は資金面などもあり諦めましたが、結婚し子どもが生まれ家族旅行をするようになるとペンションへの想いが再熱。いくつものペンション村や観光地を見て回る中、唯一、土地柄や医療環境など何も調べずに行ったという峰の原高原の空きペンションに即決し開業を決意。奥さまへの大説得を経て、ご夫婦と三人の娘さんの五人で移住されました。



●ペンションの様子

もうすぐ見頃を迎えようという桜の木と深緑の屋根が印象的な山の宿木まま。階段を下り玄関を抜けてリビングの扉を開けると窓辺にずらっと並ぶ植物たちが目に入ります。たくさん並んでいるけれど、整頓されており心に落ち着きを得られます。これらの植物はオーナーの昔からの趣味の一つだそう。中古の建物ならではの特征として、前オーナーの手作りという石壁の装飾や畳のスペースなどが見られます。これらは変化させることなく残り、木まらしさを施して生かされています。



畳のスペースの向かいには、広々としたダイニングがあります。こちらもしっかりと整頓されていて走ったり寝転んだりしても安全・安心の印象。廊下やダイニングに並ぶマンガたち。「実はほとんど読んだことがないよ」というオーナー。というのも、木ままにあるマンガの多くはお客さまが置いていったものや送ってきたものだそう。このようなやり取りのあるお客さまとのキヨリ感はペンションらしさの一つです。



●ペンションオーナー

昨年度までの六年間、地元観光協会の総務を務められていたオーナー。いつでも優しく穏やかなイメージがありましたが、ご本人いわく実はせっかちだそう。お料理から大工仕事まで“造ること”が趣味で、駐車場の土留めやペンションのテラスもオーナーの手作り。

「せっかちだからやり始めると早い!」、「モノづくり、あれもこれも(好き)。楽しみながらする!」と作業を楽しんでこなされている様子うかがえました。



●ペンションについて

「ペンションの楽しみの一つ、食事。どのようなお料理?」

—「うちは完全に家庭料理。順番に出てくるコーススタイルより、一度にたくさん並んで

いる方が目で見て楽しめて好きだからうちはそのスタイル。お酒を呑まれる方も多いしね」

そんな季節折々の食材を用いた和洋折衷の“木ままの家庭料理”だそう。

「開業当初から変わらないことはありますか？」

—「できるだけお客さまのご要望を聞く、受け入れる姿勢は変わらない。家族には『歳を考えて！』と注意されることもあるけどね（笑）」

というのも、昔のペンションには、お風呂の時間帯やチェックイン・アウトの時間などお客さまに対して多くのリクエストが書かれた紙が貼ってあったそう。だからこそ、あえて木ままはそれをせず、できるだけ要望に応える宿に。ただし、深夜のチェックインなどの一部業務に関しては体力を考慮し変化していることもあるそうです。

「山の宿木ままのこれからは？」

—「定年がないため、夫婦二人が健康でいることが前提です」

ペンション業は儲けを考えてやる“商売”とは違って夫婦二人で行う“趣味”。だからこそ楽しみながら出来たらいいそうです。

●峰の原高原について

「峰の原高原の魅力は？」

—「この質問にはいつも困っちゃう。今一つピンとこない。季節ごとの見頃なら言えるけれど永遠の課題だね。…うち、木ままがここにあること、ですね。」

いい自然やきれいな星空は、結局は他の地域にも当てはまるからなかなか難しい。だけれどその中でも木ままは峰の原高原にしかない。木ままがここにあるからここが輝く。ペンション一つ一つの輝きが峰の原高原を輝かせる、と教えていただきました。ガッテン！

「これからの峰の原高原は？」

—「基盤はできているから、魅力を発信して、峰の原高原で暮らしたいと思う人をつかむこと」

峰の原高原は開村から約50年。インフラ整備は進み、生活の基盤はできています。山暮らしだけれどペンション＝西洋民宿という、洋風っぽさ、都会っぽさがある面白い地域、と教えていただきました。



●おわりに

開業後にお客さまからの「連れてってよ！」という声から始まった「木ままツアー」。オーナーが旅程を考え、下見などを経てお客さまと一緒に旅をするという企画。お客さまの

年代や時期によって企画内容を変え、木ままに宿泊することもあれば日本を飛び出すことも。木ままならではの過ごし方。ぜひ訪れてみてはいかがでしょうか。

～*～*～*～*～*～

山の宿 木まま

<https://kimama.minenohara.jp/>

～*～*～*～*～*～

(須坂市地域おこし協力隊 日下未夕)

No100 須坂市は人が優しいまちです / <移住者インタビュー>「移住支援信州須坂モデル」で千葉県から移住しました

「須坂市は自分が描くイメージのまちでした。市内を囲む里山に感動でき、開放感のある風景です。市内には花が溢れていてよく目にします。まちを歩くのがこんなに楽しいなんて今までは考えられなかったです」

千葉県からお子さんと二人で移住されたAさんは、念願だった長野県への移住を果たし、2020年3月に須坂暮らしをスタートさせました。4月にはお子さんが小学校1年生になったばかり。

信州須坂移住支援チームとの出会いは、2019年6月、東京の長野県アンテナショップ「銀座NAGANO」で行われた須坂市移住個別相談会でした。

●移住のきっかけ

「移住前は両親がいる千葉県で暮らし、生計を立てるためにダブルワークをしていました。しかし、子どもと過ごす時間が作れないことに疑問を抱きながら数年が経ち、このような生活に限界を感じ移住を検討し始めました。若い頃、長野県のレタス農家にアルバイトで滞在していた際に、気候がよく住みやすい環境やきれいな空と山を見て感動した経験から、移住するなら長野県と決めていました」

お子さんの小学校入学までには昼間だけの仕事に変えようと考えていたAさんでしたが、それならいっそのことこのタイミングで長野県へ移住しようと思い立ち情報収集を始められました。両親のもとを離れ「自立したかった」というAさんの言葉には親としての真摯な態度が感じられました。



●移住支援信州須坂モデルでサポートを受けました

「移住を検討し始めてから長野県内の市町村について情報収集をしました。数ヶ所の自治体のツアーにも参加しましたが、まちの様子が自分の思うイメージではなかったり、住居があっても仕事が見つからない環境だったり希望に合致しませんでした。ツアーでは、個人に対するサポートより参加者全員に向けた町の紹介で終わってしまうといったものがほとんどでした」

「須坂市を知ったのは、長野県の移住サイト「楽園信州」で東京の銀座NAGANOで開催していた個別相談会の情報を見つけたのが最初でした。仕事と住居を一括して相談に乗ってもらえるということで期待を持って参加しました。相談会では仕事の具体的な話ができたことで「これなら移住できるかもしれない」と予感がしました」

—就職先の決定—

「仕事相談では、自分には特に資格も無いし、子育ての時間の制約からも理想の求人への応募は難しいだろうと考えていました。須坂市の移住者受入協力企業30社の情報を調べながら相談と検討を重ね、絞り込んでいく中で希望する食品製造関係の企業に辿り着きました。最初に希望した企業での採用が難しい状況になった際は気持ちが落ち込みましたが、信州須坂移住支援チームで寄り添った対応をしていただいたこともあり、移住への気持ちが消えることはありませんでした。悩む時間があった分、強い気持ちで乗り越えられたと今は納得しています」

—住居の決定—

「移住者受入協力企業の採用が決まったことで市営住宅の応募が可能になりましたが、当時ちょうど令和元年東日本台風災害と重なってしまい応募が中断してしまいました。再開するまでドキドキして過ごしましたが、当初計画していたタイミングで申し込むことができました。抽選で決まった住まいは予想以上のもので大変満足しています」

—移住支援信州須坂モデルを使っでの移住—

「仕事や住居の決定に至るまで信州須坂移住支援チームからの情報提供やサポート、また現地に足を運ぶ際も移住体験ハウスを利用しながら打ち合わせを重ね、一つひとつ計画的に準備をすすめることができました。須坂市へ移住してからは子どもと過ごす時間も増え、課題が解決できたことがうれしいです」



●現在の仕事や職場の様子

「移住するタイミングよりだいぶ早めに内定をいただけたおかげで、それまでの仕事も安心してギリギリまでこなせました。新たな地でスタートするには仕事の決定は大きな安心材料となり大変助かりました。採用していただいた移住者受入協力企業には子どもの小学

校入学に合わせて約4ヶ月先の受け入れを考慮いただき、しかも就業日も希望に合わせてもらい本当に感謝しています」

「職場までは車で10分、市内は渋滞も無いです。ただ、この春に待ち受けていたのは新型コロナウイルスの影響による小学校の臨時休業でした。忙しい朝もファミリーサポート会員さんやご近所のご協力をいただき、児童クラブに通わせながら働いています。仕事は夕方17時のチャイムとともに終え、帰ることができます。子育てをしながら働く身としてはとても良い環境だと思います。職場の方たちからも休みが取りやすいという話を聞き安心しました。今は親子で規則正しい生活を送っています」

●須坂市の暮らし環境

「相談をすすめるなかで初めて須坂市に来たときは、観光地のような人混みもなく静かで心地よく、眺める山々がきれいで印象がとても良かったことを記憶しています。自分が住んでみたいと思うイメージと合っていました。気候は千葉県よりも湿度を感じずカラッとしています。冬は雪の里山風景にも感動しました。近くには温泉もあって安く入れますし、お散歩も楽しめて、都会と違いお金を使わずに時間を過ごせる場所が多いのが魅力だと思います」

「買い物環境は、スーパーマーケットやドラッグストアが多いと感じました。今日はどこに行こうかと選べるほどです。市内がコンパクトなため車を使えばどこへ行くにも便利です。食料品は特に野菜やフルーツが美味しくて新鮮さが違うと思いました」

お子さんもお母さんといっしょに頑張っています。インタビューでは須坂市の印象をしっかり答えてくれました。

「いろんな景色がいいし、動物園もあって楽しい。遠くの山も見えるし、近くで花を見るのも大好き」

須坂市のシンボルのな里山「臥竜山」もお散歩しながらお母さんと登ったそうです。

「現在、小学校は新型コロナウイルスの影響により分散登校をしているため、ファミリーサポートの制度を使ってご近所の会員さんに助けていただいています。自分の出勤時間と同時に自宅に迎えに来てもらい、児童クラブまで連れて行ってもらっています。通常の登校ができるまで忙しい日は続きますが、子どものお友達の親御さんたちも声をかけてくれたり周りの協力のおかげで過ごせています。以前まで暮らしていた環境では、まちで人に声を掛けられるということはありませんでした。須坂市の人たちは気軽に声掛けをしてくれたり、助けてくれる方がたくさんいます。人が優しいまちだと感じています」



●移住を希望される方へ

「長野県内各地を実際に見たりしながら移住の準備を進めてきましたが、何よりも大変だと感じたのは、離れた場所の仕事を自力で探すのはとても難しいことだということです。信州須坂移住支援チームのサポートがあったので自分が納得できる就職先にたどり着いたと思います。都会よりも地方の求人は給与内容もたしかに下がる場合もあるかもしれませんが生活はできます。また、須坂市は子育てするにはとてもよい環境だと感じますし、生活する便利さがあります。これは移住するのに大きな決め手になる要素だと思います」

「正直なところ、移住する直前にこれでうまく生活していけるのだろうかと不安になりました。自分自身の不安は無かったのですが、子どものことが心配でした。不安や心配だった箇所は現地に足を運んで、信州須坂移住支援チームのお力を借りながら不安を解消し前向きにスタートする事ができました。人とのつながりも子どもを介して多くなるとは思います。市内のお店や地域の人たちとも広く関わって楽しみを増やしていきたいです。移住してから近所のおやき屋さんや移住者の方が経営するコーヒーショップに行きましたが、これからもいろんな方にお会いするのが楽しみです。子どもと2人での移住は決して簡単なものではなかったけれど納得した移住で自分が思い描く未来に大きく近づくことができました」



●おわりに

～Aさんから移住後のメールより～

今回、移住前にご相談させてもらって信州須坂移住支援チームの皆さんに背中を押して頂きながら、勤務先と住居が決まり生活に不安のない環境でこちらでの生活が始められる事に改めて感謝しています。

子供の事など不安もありましたが寄り添っていただき自分だけでは叶わないような望み以上の生活が始められていると実感しています。

と同時に個々に寄り添い、誠実で真剣な姿には本当に頭が下がります。

どうかお体に気をつけてください。

本当に本当にありがとうございました。

また市役所に行った際には元気な顔をみせられるようがんばります。

インタビューの際も「須坂市に移住して良かったです。ここなら移住できると思えた場所でした」というAさんの言葉、そして小学校入学後まもなくコロナウイルスの影響から児童クラブで過ごす日々が続くお子さんも「今が楽しい！」と笑顔で答えてくれた姿は、逆にお手伝いさせていただいた私たちが勇気づけられる思いでした。

東京の銀座NAGANOでの移住相談会から移住まで約9ヶ月間でしたが、Aさん自身の努力の部分が大きく、自ら良い状況を引き寄せるように一つひとつが決まっていきました。

た。

これからも二人三脚、お子さんの天使の様な笑顔にも助けられながら、須坂市で充実した子育てと田舎暮らしを送ってほしいと願っています。



(2020年5月インタビュー)

須坂市移住・定住アドバイザー 豊田貴子

ペンションってこんなところvol.6『時空の杜』 / 須坂市地域おこし協力隊 日下未夕の「峰の原高原へお出かけください♪」vol.9

こんにちは、峰の原高原地域おこし協力隊の日下です。6月に入り、峰の原高原ではツマトリソウやスズランなど白色系のお花が咲き始め、見上げる木々は新緑に包まれています。

今回もペンションオーナーやオーナー夫人と話して感じた“このペンションってこんなところ”を紹介します。今回は『時空の杜（そらのもり）』さんです。



●峰の原高原を訪れたその日に虜になりました！

時空の杜のオーナー中澤さんご夫妻は、千葉県にお住まいで、2015年6月に峰の原高原でペンションを開業しました。千葉縣市川市の林間施設が売却されることを知り、友人と施設を訪れた際、昼間の快晴、夜間の星空、峰の原高原の一番上に位置するという立地から、その場所の“虜”になったそう。その虜になった場所こそ、現在の『時空の杜』です。中澤さんはペンションに宿泊経験があり、ペンションを経営する人たちは何かしらの“こだわり”を持っていることを確信していたため、峰の原高原の良さ、ペンションの良さを確立し、峰の原高原をブランド化したいと考え開業しました。



● 広大な敷地と格別の眺望の良さを感じられるペンション

時空の杜の第一印象はやはり広い、大きい、というその規模。旧林間施設ということもあり、広大な土地に大きな館、そしてバーベキュー場やバンガローなど施設が充実しています。

また、峰の原高原で最も眺望の良い「サンセットテラス」よりもさらに高い時空の杜からの眺めは格別です。「外が気持ちの良い季節になると知らない方が駐車場でお弁当を食べていることが何度かあったわ」と、ご夫人。これを拒むこともなく「どうぞ、ごゆっくり」と。ステキです。

メインロジの玄関を抜けてダイニングの扉を開けると全面ガラス張りの窓。窓の外にはシラカバなどの樹木が目の前に広がり、部屋に居ながらにして、外にいるかのような開放的な体感を得られます。新緑の季節はもちろん、雪化粧の季節は特に圧巻の光景と私は感じました。また、奥のテーブルの上には「クリスタルボウル」という楽器が置かれ、ダイニング内に響く穏やかな音色が時空の杜によくなじみます。



客室にはベッドだけでなく、団らんでできるスペースがあります。
広い施設ならではの客室。プライベートな空間でゆったり過ごすことができそう。



●移住をしていないからこそ感じられること

建築家でもあるオーナーの中澤さん。現在も現役で、平日は首都圏で建築関連の仕事を、週末は峰の原高原で宿泊業をしています。

「移住をしていないからこそココを客観視でき、魅力を発見したり、他の地域と比較したりできる」と中澤さん。

首都圏と行き来がある中澤さんだから気づくことができ、住んでいると当たり前になりがちなことを当たり前とせずに人に伝えることができる。そういう視点が大切だと改めて感じました。

●究極の朝食を提供します

「ペンションの楽しみの一つ、食事。こだわりはありますか？」

—「作り手がワクワクするお料理。食材も生きているから、作り手の楽しさはきっと食材も喜び、いい食事を提供できる。お料理の最中に“こっちの方が楽しそう！”と思ったら変更するし、“もうひと手間加えたら、もっとこうしたら楽しくなる！”と思えばやってみます」

「泊まった方が最後に召し上がる朝ごはんは大切にしています。究極の朝食を提供するため、手は抜きません」

時空の杜では、“おすそ分けプロジェクト”という、中澤さん夫妻が愛するもの、大事に思えるものをお客さまに提供するために食材となる野菜などを育てるところから始めています。また、“素食”という見た目がシンプルで素材を活かした丁寧なお料理を学び、提供できるようにしています。

●人を育てるのが時空の杜です

「規模が大きいかからこそ心掛けていることはありますか？」

—「ココは家族経営ではないためペンション業ではなく、“社会”。家族経営ではないからこそ規律性、厳しさ、優しさ、愛があります。従業員は、家族であり子どものような存在で、時間があれば夢や未来について語り分かち合います。そんな“人を育てる”のが時空の杜です」

以前に伺った際に、従業員さんとの距離感がとても程よく感じられたことがありました。企業は仕事ができる人材を育てるけれど、時空の杜はその人自身を育てる。中澤さんのお話を聞いて、思わずガッテン。



●時間と空間を超えて過ごすことができる場所

「時空の杜のこれからは？」

—「ペンションでもホテルでも旅館でもない“ココは時空の杜”。時間と空間を超えて過ごすことができる場所。色んな人が色んな人と色んなことをする場所にしたいです」

●訪れたいくなるような場所に

「これからの峰の原高原についてどのように想いますか？」

—「合宿場にならないための地域づくりが必要。来訪者が増えること、つまり訪れたいくなるような場所でありたいです」

●おわりに

臓器を活性化する手法や感情を含めた浄化法を学ぶ「プチ断食リトリート」は、外部から講師を招き、季節に合わせ二泊三日で行っています。一度日常から離れてリセットしたい方におすすめです。峰の原高原ならではの、時空の杜ならではの過ごし方。ぜひ訪れてみてはいかがでしょうか。



～*～*～*～*～*～

時空の杜ホームページ

<http://www.soramori.info/>

～*～*～*～*～*～

(須坂市地域おこし協力隊 日下未夕)

No101大阪から移住した東脇ゆき子さん / <移住者インタビュー> 古民家をリフォームして夢だった田舎暮らしを満喫しています

東脇ゆき子さんは、ご主人と須坂市内の山側に位置する豊丘地域に移住して1年半になります。大阪で結婚をして間もない頃から今後の人生について話し合っていたご夫婦は「豊かな自然環境で子育てをしたい」という夢を掲げて「移住」という選択肢に至りました。2017年12月に開催された大阪での長野県移住セミナーでお会いし、約1年後に須坂市へ移住しました。20代の若い夫婦が協力し合って果たした移住です。現在は古民家をリフォームし大好きなペットたちといっしょに須坂暮らしを満喫しています。

今回インタビューに答えてくれた奥さまのゆき子さんは、須坂市を「移住して良かったと思える場所です」と答えてくれました。



●移住のきっかけ

大阪府堺市出身のゆき子さんは、父方の実家が山際にあったことで、幼い頃から山のある風

景に憧れを持っていたそうです。

「主人のお姉さんが結婚して長野市に住んでいたことで、長野県にはよく遊びに来ていたんです。大阪とは違ってカラッとした気候で空気も澄んでいて良い環境だなと感じていました。いつかは長野県のような自然豊かな環境で暮らしたいと夫婦で話すなかで『子育てするなら今のうちに探して決めよう』と思ったのがきっかけでした。それから間もなく大阪で長野県の移住セミナーが開催されることを知り、そこに参加したことで信州須坂移住支援チームと初めてお会いしました」



●移住への準備

「まず、私たち夫婦は物件探しから始めました。理想は、結婚後から同居している大型犬（ゴールデンレトリバー）や猫たちと住める大きな家でした。身内が長野市にいたことも後押しとなり、その近隣の物件をネットで探しました。ちょうど長野市と隣接する須坂市に、私たちが求める物件が見つかったことで今の豊丘地域を知りました」



「見つけた物件は中古で600坪の土地と建物で400万円。家の広さや周りの景観、価格も理想的だったので決めました。現地を見た時も、川が流れ里山が迫る自然が豊かな環境と、隣接する長野市や北アルプスが一望できて、須坂市内でも雰囲気の良い場所だと思いました。ホテルが見えるという話も聞いて、驚いたのと同時にとても魅力を感じました」



「物件は地域の業者に依頼してリフォームすることになり、主人が中心となって考えてくれて、古くても残せる部分を上手く活用しながら進めました。私たち夫婦は室内に木が沢山ある家に住みたかったので、もともとあった柱を残したり壁も木張りにするなど、こだわって作りました。一番は夢だった薪ストーブの設置でした。冬でも一度温まると室内は30度くらいまで上昇し半袖でも過ごせます。薪は地域の方の畑で剪定された木や、山を持っている方からいただいたりしています。体を動かすことが好きな主人は薪割りもします。こんな夢が叶ったのも、この地域だったからこそと思います」



「もともと私は看護専門学校を卒業後、看護師の資格を取得し、大阪の病院で勤務していました。私は3人姉妹の末っ子で、15歳離れた一番上の姉も看護師です。その姉の姿に憧れていた私は小学生の頃から看護師を夢見ていました。その看護師の仕事は移住後も続けたいと希望していたので、信州須坂移住支援チームに相談しました。須坂市内にある総合病院の信州医療センターは、須坂市移住者受入協力企業の一つでもあったので興味があり見学を希望したところ、看護部長との面談の場を設定してもらい院内見学をしました。看護部長にはとても親切に対応していただき病院の印象も良かったのを覚えています」

「医療施設は須坂市周辺に数多くあって、隣接する長野市も含めながら検討しました。結果的に大阪で働いていた病院の雰囲気似ていた長野市内の病院を希望し採用が決まりました。家から病院までは車で約30分ですが、以前の大阪でも同じくらいの通勤時間だったので気になりませんでした。逆に県庁所在地の長野市と須坂市の往来のしやすさから便利な地域ということが理解できます。賑やかな長野市から静かな須坂市に帰ってくるとONとOFFがつけやすいので須坂市は生活する場所という感覚です」



●須坂市の生活環境について

ー北アルプスがくっきり見えた日はラッキーー

「須坂市は、夏は日中暑くても湿度が低くカラッとしているので過ごしやすい環境です。冬の積雪も承知をして移住しましたが、想像より少なく今年もほとんど雪かきをしませんでした。春は桜が身近で見ることができて新鮮でしたし、なんと言っても北アルプスの雪山が見えたのが感動的でした。くっきり見えた日はラッキー！この地域で目にする景色から大きく心を動かされています」



―新鮮で安くておいしい食べ物

「スーパーで買う野菜は地場産なので新鮮で安くておいしいです。そしてお水がおいしいからご飯もおいしいです。海のない県だからでしょうか、大阪にいた時より海鮮ものが足りない気もしますが…。郷土料理のおやきは元々好きだったので、より身近になってうれしいです。同じ豊丘地域に住む移住者の方からイノシシの肉をいただくなど交流もさせていただいています」



〈庭のタラの木：春にタラノ芽が味わえるのも楽しみ〉

●移住を希望する皆さんへ

「須坂市は田舎の部分も便利な部分も両方そろった町です。私たち夫婦が住んでいる豊丘地域は市内でも山側になりますが、車で10分もあれば便利な市街地に出ることができます。大阪にいた時も車を利用していましたが、渋滞が多く、人も建物も密集していて、今では帰省する度に重苦しいと感じてしまいます。それに、きれいな美味しい空気がわかるようになりました。子育て支援もしっかりしていることを知ったので、ぜひ移住を検討する若い世代の方たちに豊丘地域はおすすめです。人生を見直したい人や心機一転したい人にも、きっと新し

い刺激があると思います。今後は私も子育てを希望しています。豊かな自然のなかで育つことができる豊丘保育園に通わせたいです！」



●おわりに

20歳代の東脇さんご夫婦は、これまで信州須坂移住支援チームが対応したなかで最も若い相談者でした。古き良きものを活かしたリフォーム古民家は素敵な工夫がされていて、夫婦で話し合い着実に行動された結果が感じられました。夢だった広い住居で、大好きなペットたちと引き続き楽しい毎日を送ってほしいと願っています。そして、東脇さんご夫婦に続き多くの若い世代の方たちと出会える豊丘地域になるよう、信州須坂移住支援チームでもさらなる地域の魅力を発信していきたいと思います。



信州須坂移住支援チーム（移住・定住アドバイザー） 豊田貴子

こんにちは、峰の原高原地域おこし協力隊の日下です。

6月中旬になり、峰の原高原では時々姿を見せるリスの冬毛が抜けていたり、レンゲツツジが咲き始めたりと初夏の訪れを感じられます。

今回もペンションオーナーやオーナー夫人と話して感じた“このペンションってこんなところ”を紹介します。今回は『ペンションフレデリック』さんです。



●まさかペンションをやるなんて

「主人の療養のために移住し、まさかペンションをやることになるなんて思ってもみななかったわよ」

ペンションフレデリックのオーナー三好さんご夫妻は、兵庫県西宮市から峰の原高原に移住され、1975年7月に「三好ペンション」を開業しました。上田市の菅平高原にあったご主人の勤め先が閉鎖することになり、「ペンションをやってみませんか？」という業者からの誘いと「みんなの別荘にしよう！」という親友からの言葉に背中を押されてペンション業を始めることにしました。しかしペンションブーム真っ只中の多忙さに加え入退院を繰り返すご主人の体調を考えて5年間で閉業しました。ただ、「療養のため自然豊かな峰の原の環境は変えないほうが良い」と医者から言われたため、規模を縮小し「ペンションフレデリック」として再スタートしました。



●音楽好きにはたまらない！

ペンションの中にも外にも、至るところに野ねずみのキャラクター“フレデリック”がいます。「フレデリックがとにかく大好き！という思いでこの名前にしたのではなく、ご近所の方が、フレデリックがいいんじゃない？と作者レオ・レオニの絵本を持ってきてくれたのがきっかけです。絵本を読んだ時、フレデリックが主人で、その周りに登場するのが私たち家族のように感じられたんです。ここにあるグッズやお部屋の装飾品はお客さんからのプレゼントが多く、中には手作りのものもあります」ペンション内に何匹居るのか、数えてみるのも面白そうです。



玄関とリビングには立派なピアノがあります。そしてレコード約1000枚が並ぶ部屋は音楽好きな三好さんそのもの。ゆっくり座ってCDやレコードを選んだり聞いたりできるようオーナーの工夫があります。お客さんの中には、スキー板を車に乗せたまま、持参した好きなCDを聴いて過ごされる方もいらっしゃるそう。周りにペンションや別荘がないフレデリックの立地だからこそ、音量や時間帯などを気にすることなく過ごすことができ、音楽を思う存分楽しめる、音楽好きには好条件のペンションです。



● 温かいお料理を温かいうちに

「ペンションの楽しみの一つ、食事。こだわりはありますか？」

—「自分がおいしいと思えるものを提供すること。お料理を一度に出す方が楽だけど、温かいお料理を温かいうちに召し上がっていただきたいから、順繰りに出します。朝食も温かいトーストを出したいので、机の上にトースターを置いています」
その日の夕食のためのお料理を約半日かけてするという三好さん。たくさんの種類を、手間ひまかけて作る洋風家庭料理、これがフレデリックごはん。

● 子どもはお客さまに育ててもらいました！

「子どもはお客さまに育ててもらいました。三好ペンションを閉業した時、再びペンションをやるつもりはありませんでした。しかし、子どもが“〇〇お兄ちゃん（常連さん）が来た時どうするの？”と言い、再びペンションを開業することにしました。そのくらい子どもはお客さんに懐いていました」

「予約があると子どもの迎えに行けないこともあったけれど、子どもは夜道でも“上を見ると、木があるところは真っ暗だけど木がないところはうっすら明るいよ、だから夜でも道が分かるよ”と親が気付かない間に成長していて驚いたこともありました」

峰の原高原の子どもが隣の上田市の小・中学校へ通う“越境通学”。三好さんのお子さんがこの一人目でした。当時話し合いが行われ、旧真田町と須坂市の間で公式協定が結ばれ通学が可能になりました。峰の原高原ならではの、ペンション業ならではの子育ての姿と歴史を感じました。

●これからもやっていきます

「ペンションフレデリックのこれからは？」

—「ここ以外に住むところはないです。ここがちょうど良いです。お客さまが5人以上の時には仲の良い方に手伝っていただきながら、やっています。これからもやっていきます」

●新緑のカラマツと

「峰の原高原の魅力は？」

—「春の新緑のカラマツです。フレデリックは窓からそれを見て、感じるができます。雨が降った後のカラマツは特に魅力的。うっすら墨汁の香りがすることもあります。また、峰の原高原の静けさは他にはない魅力です。風が吹いたな、鳥が鳴いたな、新聞屋さんが来たな、一つ一つの音が分かります」



●おわりに

訪れた際にぜひ触れていただきたいモノが客室のキーホルダーです。三好さんが「宝物！」と言って見せてくれました。なんと、お客さまからの手作りプレゼント。たくさんの年月と思い出が感じられる一品です。

「音楽漬けの日々が一番幸せ！」、「今が私の青春！」、そんな風に自分のやりたいことをやりたい時に、峰の原高原の良い環境でできる今がとても幸せと語る三好さん。時間を忘れて様々な“音”を楽しみたい方におすすめ。ぜひ訪れてみてはいかがでしょうか。



～＊～＊～＊～＊～＊～

ペンションフレデリックホームページ

<http://frederick225.web.fc2.com/>

～＊～＊～＊～＊～＊～

(須坂市地域おこし協力隊 日下未夕)

綿と羊毛とアロマで癒しを届けたい！ ／ 須坂市地域おこし協力隊 宮島麻悠子の『須坂おもしろ人物記』 vol.9

こんにちは！地域おこし協力隊の宮島麻悠子です。

須坂で活躍している方へのリレーインタビュー、今回は日台美知代（ひだいみちよ）さんです。



宮島：日台さん、というよりも「アロマのみっちゃん」の方がピンと来る方が多いかもしれませんね。具体的にはどんな活動をされているのですか？

日台さん：「誰もが簡単に楽しめるアロマセラピー」をモットーに、羊毛フェルトや綿を使った手芸・エアフレッシュナー作りワークショップなどを行っています。5年前から高山や

豊丘で、綿花の自家栽培もしています。3年前からは須坂クラシック美術館の庭でも育てているんですよ。

宮島：綿花を自分で育てているんですか！？すごいですね。羊毛フェルトや綿を使った手芸はどんなものなんですか？

日台さん：代表的なのが、私のオリジナル商品の「ふわふわラベンダーボール」です。説明するより実際作ってもらった方が分かりやすいので、やってみましょう！

まずラベンダーを綿で包み、ラベンダーにオレンジのアロマオイルを数滴ふりかけます。ラベンダーはリラックス効果があり、よく眠れるのですが、オレンジは気持ちが前向きになる効果があり、組み合わせるとよく眠れるプラス翌日元気に目覚められるようになります。



〈ラベンダーは相森中学校で育てているものを買い取って使用〉

さらに好きな色の羊毛でくるみ、羊毛フェルト用の針でチクチク刺して固定します。そこにさらに別の色の羊毛をうすくかぶせ、チクチク刺してを繰り返し、色々な色が混じり合った感じにします。



〈羊毛フェルト用の針には小さな溝がついていて、チクチク刺すだけで毛が絡まり形ができる〉

お花は小さく切った羊毛を半分に折ったものを1つにつき5枚、チクチク刺して固定し、真ん中にボール状に別の色の羊毛を固定したら完成です。



〈一般的な羊毛フェルト手芸より、かなりふんわりした仕上がり〉

宮島：本当に初めてだったのでキレイに作れるか心配でしたが、意外と形になるものですね。

日台さん： そうですね ^ ^ もともとアロマは好きで、JAA（日本アロマコーディネーター協会）のインストラクター資格を持っており、アロマスクールも主宰していますが、アロマオイルの瓶だけ持ってアロマの素晴らしさを語ってもなかなか伝わらなかったんですよ。それで、「難しいことは抜きにして、もっと手軽にアロマを楽しめるものを」と思って開発したのが「ふわふわラベンダーボール」だったんです。色々なご縁に恵まれて、須坂市内だけでなく黒姫や飯山でもふわふわラベンダーボールのワークショップを開催し、みなさんに楽しんでいただけています。ここ最近はコロナでイベントが軒並み中止になってしまい残念ですが、劇場通りに今年オープンしたペチャクチャハウスでは、感染予防対策を講じた上でワークショップを続けさせてもらっています。

宮島： なるほど～！確かに、アロマセラピーを本格的に学ぼうとしたら、学ぶことが多くて躊躇してしまいそうです。でも、ワークショップで手を動かしながら「これは安眠効果があるから寝る前に香りをかぐといいよ～」みたいに教えてもらおうと、すんなり知識が入って来ますね。参加された方の反応はどうか？

日台さん： 簡単なので、お子さんから90代の方まで、幅広く楽しんでいただいていますよ。出来上がる作品も人それぞれ個性があって面白いです。本格的にワークショップを始める前、80代くらいの女性がワークショップに参加してくださった時の忘れられない言葉があります。その方はハンディキャップのあるお子さんの介護をずっとされていたのですが、帰り際に呼び止められて「こんなに楽しい場はこれまでなかった。ありがとう」とのお言葉をいただきました。こんなに人に喜ばれる経験は無かったですね。これがきっかけで、各地でワークショップをするようになりました。

宮島： 素敵ですね！子育てや仕事に頑張っている女性は、どうしても自分が楽しむ時間は後回しになりがちですもんね。
ちなみに、綿花の自家栽培についても詳しく伺いたいのですが、きっかけは何だったんでしょう？

日台さん： 高山で綿花の栽培をしている山本さんに呼ばれて畑に行った時、始めて綿の実が弾けているのを目の当たりにしました。それで、「これで何か作って！」と真っ白の綿を渡された時の温もりに感動して。最初は丸めて卵の形にし、「わたまご」というものを作りました。綿には少し油分があり、触っていると手がツルツルになるんですよ。それですっかり綿の魅力にとりつかれてしまいました。

宮島： 今初めて実からはじけたばかりの綿を触らせていただきましたが、フワフワで気持ちいいですね！ふわふわラベンダーボールは羊毛でくるんでいますが、綿だけでも何か作れるものなのでしょうか？

日台さん： 今まさに植物で綿を染めて、オール綿で作品づくりを始めているところです。基本白と茶色の綿を育てているのですが、茶綿が突然変異して、緑の綿ができました（笑）



〈上が白綿、下が緑綿〉

宮島：なんと！でもキレイな色ですね。これからもどんな作品が生まれるのか楽しみです。

たくさん楽しいお話をありがとうございました。次の方をご紹介いただけますか？

日台さん：ペチャ＊クチャ ハウス（NPO法人P・Kパラダイス）の横山さん。ちょうどそこにいるので（笑）ふわふわラベンダーボール黎明期から何かとお世話になっています。

宮島：ありがとうございます！というわけで次回のインタビューは横山励子さんに決定しました。お楽しみに！！

◎アロマのみっちゃん

Facebook [アロマのみっちゃん - Home](#)

★バックナンバーはこちらのサイト内でもご覧いただけます

The secrets of SUZAKA 信州・すざかのないしょ話

（須坂市地域おこし協力隊 宮島麻悠子）

No103 パンションってこんなところvol.8『ペンションきら星』 / 須坂市地域おこし協力隊 日下未夕の「峰の原高原へお出かけください♪」vol.11

こんにちは、峰の原高原地域おこし協力隊の日下です。

6月下旬になりましたが、梅雨で肌寒い日が続いています。峰の原高原の梅雨は、独特の“ジメジメ”や“ベトベト”を感じることなく過ごしやすい日々です。また、あやめが見頃を迎え、緑が広がるゲレンデに彩りを添えています。

今回もペンションオーナーやオーナー夫人と話して感じた“このペンションってこんなところ”を紹介します。今回は『ペンションきら星』さんです。



●お客さん同士が交流できる宿泊施設に

ペンションきら星のオーナー湊さんご夫妻は、東京都から須坂市峰の原高原に移住し、1997年7月に賃貸のペンションで開業しました。そして二年半後の1999年11月、「やはり自分たちの宿を持ちたい」という思いから空き家になっていたペンションを購入、修繕し、「ペンションきら星」を開業しました。

旅好きな湊さんご夫妻。お互いに若いころからユースホテルを利用した旅を通して、お互いが「いつかお客さん同士が交流できる宿泊業をやってみたい」と思っていたそうです。素敵なことにお二人でその夢を実現されました。



●子どもの宿泊也大歓迎！

約20年前に開業したペンションきら星。当時の峰の原高原にはすでにたくさんのペンションがありました。しかしその中でも、「子ども大歓迎」を大きく打ち出しているペンションは少なかったそうです。以前はスキー場に託児所があったこともあり、小さいお子さんがいる家族のお客さんが一定数いたこと、湊さんご夫妻の子育ての時期とリンクしたこともあり、「子ども大歓迎」をペンションのテーマにしました。離乳食、アレルギー食にも対応しています。

ご自慢のプレイルームは半地下にあり、なんと22畳という広さ。色々なおもちゃとたくさんの種類の本があります。ここにあるおもちゃの中には、常連のお客さんが「おさがり」

としてくれたものもあるそうです。また、トランポリンやスラックラインなど大人でも一度はやってみたい！と思うものもあります。床全体にじゅうたんが敷いてあり、とんでも！はねても！転んでも！安全安心な空間です。



「当時、離乳食を用意していたお子さんがもう成人しています！大人より子どもの人数の方が多いという時期もありました！」近年では、半地下の涼しさを生かし、夏の陸上合宿でミーティングルームとして利用されたり、音の漏れが少ないことから楽器の練習に利用されたりすることもあるそう。使い方は無限大です。



●お客様と一緒に採ってきたものを料理します！

ペンションきら星では、峰の原高原の標高だからこそできる山菜採りや根曲がりだけ採

り、きのご狩りのガイドをしています。危険を伴うため興味があっても採りに行きづらい根曲がりだけやきのこを、お客さんと一緒に安全で楽しく採りに行き、それを調理してお料理に出すのがきら星流。オーナーが採ってきたものを調理して出すペンションはありますが、“一緒に採りに行って食べる”というペンションは珍しいのです。きのこの季節は採ってきたものをそのままお鍋にして堪能することができます。

湊さんご夫妻は元々きのこに詳しくはなかったわけではなく、ある時、玄関先にきのこが出ていて「これは食べられるの？」となったことをきっかけにコツコツ調べたり勉強会に参加したりして詳しくなったそう。どこに、どんなきっかけがあるかわかりませんね。



●行きたいと思ってもらえるような発信を、楽しめる範囲で

「ペンションきら星のこれからは？」

—「お客さんに心配させるようになるとアウト。サービス業として掃除や食事では手は抜けません。宿泊業のメリットは予約制だからロスがない、待ちぼうけもない、在庫を持つ必要がないということです。ただ、昔は泊まることが目的だったけれど、最近は泊まること以外に目的がないと来ないので、人が来る目的が必要です。“自分が行きたいって思うところってどんなところ？”と言われて思い浮かべるところは、何かで見て、聞いて、“良さそう”って思ったところ。行きたいってと思ってもらえるような発信を自分たちが楽しめる範囲でやっていきます」

●やれることをやれる範囲内でやること、我慢しないこと

「若い世代へメッセージをどうぞ！」

—「資金面に余裕のない若い世代にとって、空きペンションを買ってペンション業を始めることは現実的ではありません。夢と現実の差があります。ですが、人間はだんだん億劫になっていくから若いうちに何かを始めることが大事です。“そこ聞く？”というような大人になると聞きづらいところも若いうちに聞いちゃえばいいんです。人生は何があるか分からないから“何年後〇〇行く！”というより、活動的に、やれることをやれる範囲内でやること、我慢しないことが大切です。“何年後”が元気かどうか分からないね」



●おわりに

ブログにInstagram、Facebook、とてもこまめに発信されています。ペンションきら星ってどんなところ？オーナーはどんな人？SNSを見ると確実に伝わってきます。今回きのこの話題について紹介をしましたが、きら星さんのお料理は旬のものをふんだんに使っていて、五感で楽しい！と私は思います。そのあたりもぜひSNSからうかがえると思いますのでチェックしてみてください。話し声と笑顔あふれるペンション。ぜひ、訪れてみてはいかがでしょうか。



～*～*～*～*～*～*～
 ペンションきら星ホームページ
<https://www.p-kirabosi.jp/>
 ～*～*～*～*～*～*～

(須坂市地域おこし協力隊 日下未夕)

No104 須坂市へ移住された方の手記をご紹介します / 2020年3月に関東地方から須坂市へ移住したAさんから、実際に受けた須坂市のサポートについて手記を寄せていただきました

障害を持つお子様をお持ちで移住を検討されている方にぜひ読んで頂きたいです。
 須坂市に移住して3ヵ月が経ちました。
 移住前から一番不安に思っていたことは子供の学校についてです。
 次男には発達障害があり自閉症、多動症、聴覚過敏があります。
 須坂市に移住を決めた理由のひとつは長野県で唯一の市立の特別支援学校がある事でした。
 障害のある子供にとって通う場所の選択肢は多い方がいいと思ったのと
 「障がいのある子もない子も、地域の子どもは地域で育てる」

「障がいのある人も安心して生活できる地域社会へ」
という須坂市の理念に地域と共に歩む教育活動を推進しているとあったからです。

4月になり入学式が終わると、すぐにコロナで学校は一斉休校になりました。
予定が急に変わる事や予定が無いことに対応しきれない次男は、たびたび近所で問題行動を起こしました。
彼の中でもパニックとストレスと転校してきて友達を作りたいという思いが色々交差して
もう爆発寸前だったのだと思います。

家にずっといることもできず、外に出ては問題を繰り返すので教頭先生に相談しました。
支援チームを組んで支援会議を開く事と児童クラブを利用してみたらどうかという提案を
されました。
その日のうちに児童クラブの見学と申込みをして1週間後から利用できるようになりました。

対応、行動、許可の早さと教頭先生の「これからも一緒に考えていこう」と言って下さった言葉が今でも心に残っています。

4月後半に支援会議を開いて頂きました。支援会議とは他の地域ではケース会議と呼ぶ所もあるそうですが、発達障害や困難を抱えた子供の学校生活をチームで支えるための会議です。
初回は教頭先生、クラスの担任の先生、支援クラスの担任の先生、特別支援コーディネイター、須高地域総合支援センターの担当の方、保護者というメンバーで、今困っていることや本人の様子を相談し、これからの生活にどういう支援が必要かを話し合ってくださいました。

以前住んでいた地域では、このように関係するみなさんが一堂に集まって会議をし、問題を共有して、課題や改善点を話し合うということはありませんでした。
調べるとケース会議というのは申し出れば組んでもらえるようですが、そのケース会議ですら知らない人の方が多いのではないかと思います。そして実際開催されるのも稀のようです。

ですから、一人一人、色んな担当の方へ同じ事を何度も何度も話してどうすればよいかの相談をし、相談をしても結論が出ず、結局自分でなんとかしなければいけない・・・という日々を何年も過ごしてきた私にとって、このような会議がある事は驚きと感激と感動でした。

1人で考えなくていい、悩まなくていい、探さなくていい、それは本当に心強い事です。

1回目の会議から児童クラブと併用して放課後デイサービス(障害のある子供達専用の学童保育)を利用したらどうかという事で、支援センターの担当の方が次男の特性にあった放課後デイサービスを探してくれ、見学の予約をとってくれました。
コロナの為6月まで見学ができない施設も多く、6月に入ってからすぐに見学に行き7月から利用開始できるようになりました。

以前住んでいた地域では、放課後デイサービスの存在は入学してからクラスの保護者の方に教えて頂いて知りました。
ですから入学後に病院を探し、診察して、診断書を書いてもらい、放課後デイサービスを

探し、市に申込みをして、施設と契約をし、療育手帳を申請、発行されてから利用開始となったので3カ月の期間を要し、調べたり問い合わせをしたり、見学に行くのも全て自分で行いました。初めての事でよくわからず、何度も市役所に足を運びました。

須坂市では2回目の支援会議で放課後デイサービスの施設の方、支援事業所のプランナーの方にも来て頂き、そこでいつから利用を開始するか、どのように利用するか、何日利用するかを話し合い、学校の担任の先生からは学校生活において不得意とする所、注意すべき点などを伝える引き継ぎなどを行って下さいました。

今抱えている問題点に対する改善策もいくつか出して頂きました。

発達障害、自閉症と一言で言っても症状や特性はその子によって違います。

対応方法や、改善策もその子によって違うので論文や誰かの解決策を聞いたり、読んだりしただけではその子の解決策にならないのがこの障害です。

このような会議を開いて頂く事によって、解決策が見つかったり、不安点、問題点を一度で共有出来たり、次に進む段取りが組まれていくので時間のロスありません。家庭でもどう接していったらいいか、他の障害のある子供達を見てきている方の意見はとても参考になります。

なにより、相談できる場所が必ずあるという事。話を聞いてくれる人がいるという事。これが本当に大事な事だと思います。

障害のある子の親は常にあきらめと焦りの思いにとらわれがちです。

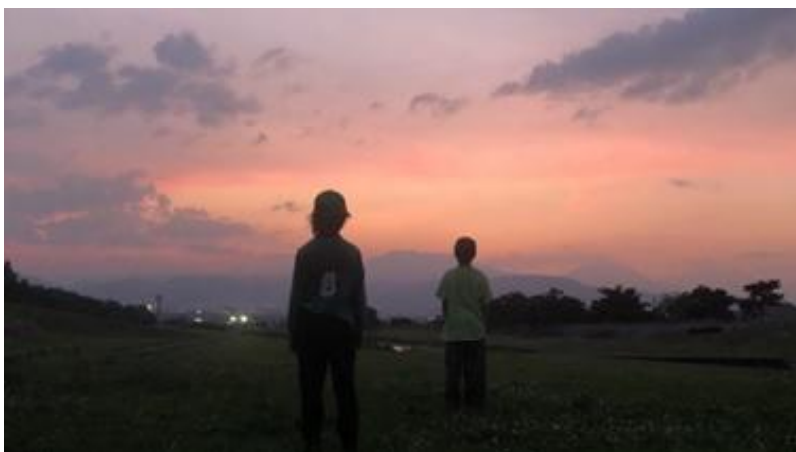
でも、人は足りないからこそ助け合えるのだと思います。

須坂市は1人で頑張らなくていいと思える町だと思います。

私はひとり親で、障害のある子供と、実家も遠い須坂市に移住をしました。なんとかなりそうだという希望と、良くなっていくという期待を持って今は生活をしています。

ぜひ、希望を持って移住してきてください。

(2020年7月3日)



★須坂市立須坂支援学校（小学部・中学部）ホームページ

<http://www.suzakashien-school.ed.jp/>

こんにちは、峰の原高原地域おこし協力隊の日下です。日本全国の至るところに被害をもたらしている長雨の終わりが見えてきた7月の今日この頃。分厚い雲を見慣れてきて、青空を少しでも見る事ができたならば幸運のように感じます。

今回もペンションオーナーやオーナー夫人と話して感じた“このペンションってこんなところ”を紹介します。今回は『ペンションガーデンストーリー』さんです。



●山下ペンションからガーデンストーリーへ

ペンションガーデンストーリーの山下さんご夫妻は、東京都から須崎市峰の原高原に移住し、2002年に山下さんのご両親からペンションを引き継ぎました。

神戸市で生まれ育った山下さんのご両親は、「人生の後半は山に住みたい」と思って1976年に峰の原高原に移住し「山下ペンション」を開業しました。当時、山下さんは小学一年生だったそうです。その後ご両親が「最後は関西に戻りたい」という思いをもっていたため、山下さんが家族と一緒に東京から戻り、経営を始めました。

代替わりをして5年後の2007年。ペンションの約9割が自身らの苗字をつけていた時代とは異なり、だんだんとお洒落な名前のペンションが増えていたことや山下ペンションではどのようなペンションか分かりづらいこと等から、「ペンションガーデンストーリー」に改名しました。インターネットが普及してきた『検索』の時代ならではの発想です。



●この地を活かしたガーデン

ペンションガーデンストーリーのこだわりは、何ととってもガーデン。ただ、庭造り好きが高じてガーデンを始めたわけではなく、峰の原高原がある国立公園では建ぺい率（土地に対する建物の割合）があり、建物が土地の20%と決められていることから、「お客さんが来る場所だから、広いお庭をきれいにしておきたい」と思ったことから始めたそうです。

「両親が園芸好きだったため、ある程度はきれいだったので、“もっときれいにしよう！”と思って始めたらハマりました。きれいになってくると、花好き・庭好きの人にも見てもらいたいと思うようになりました。須坂市でオープンガーデン事業が始まったこともあり、お庭を見るためにお客さんが来るようになりました。

昔は、小布施や善光寺、菅平高原で合宿をしている子どもの応援など峰の原高原に来る目的は様々でしたが、現在は、お庭を目当てに来るお客さんの比率が増えています。お寺巡りや温泉巡りと同じように“お庭巡り”という花だけを見に来る観光形態のお客さんです」





●**限定三名のプライベートツアー！**

「昔のお客さんは、特急+バス+お迎えだったけれど、今はほとんどのお客さんがマイカー。庭巡りの方は特にマイカーで色々なところに行くようです。ただ、ガーデン巡りはご夫婦そろって好きなわけではなく、ご婦人だけが好き、という方もいて車で来ることが難しい方もいらっしゃいます。そういう方のために、プライベートツアーという形で、長野駅まで迎えに行ってガーデンを巡り、上田方面におりてガーデンを巡り…、ということもやっています。長野県には、パブリックガーデンが複数あるのも魅力です」





●マニアックに、特化したペンション経営を

「ペンション業とは？」

—「今の時代、マニアックにやった方がいいですね。昔は東京、千葉、埼玉、神奈川の一都三県のお客さまが約9割を占めていて、その人たちはひとまず信州に来て、善光寺でお参りをして温泉に行ってお宿しよう、という漠然とした旅でした。また、ペンションブーム、テニスブーム、スキーブーム、長野県の場合はこの後にオリンピックがあったため漠然とペンションに泊まってみたい、スキーをしてみたいというお客さんが来てくれました。それこそ、道に縦列駐車していた時代、予約が取り切れず、満室で黒電話に布団をかけて聞こえないようにしていた時代もありましたよ。うちも三人のお手伝いの方に来てもらっていた時がありました。しかし、その後バブルがはじけてブームが去ってからは漠然とやっているとお客さんが来ない状況になりました。

今のお客さんはアニメの聖地巡りのように何か一つのもを目当てに動くようになっていきます。インターネットの普及とともに、それぞれの好みにあったものを選択するようになって、全員が一緒に動くより自分が好きなものを突き詰める、というように時代が変化しています。漠然と“ペンションやっています”と言うだけでお客さんが来る時代とは違います。

時代とともにペンションのスタイルも変化しています。漠然とやっているだけではお客さんが来ないので、うちのようにガーデンに特化したペンション、陸上合宿に特化したペンション、きのこに特化したペンションなど、峰の原高原でも何かしらに特化してやっているペンションがあります」

●ペンション一軒一軒が輝ける場に

「峰の原高原の魅力は？」

—「総合力がここの魅力。こんなにペンションが集まっているペンション村は多くない。ペンションはそれぞれ違うから、40軒あれば40個の魅力があって、その中のどれかに当てはまる人がいます。一軒一軒の魅力、素朴な魅力を見つけて発信することが大事です。ペンションでも、道端の山野草でも、空でも、涼しさでも何でもいいんです。つばやきや投稿を見て“行ってみようかな”となる時代。興味を持つ人がピンポイントで来てくれます」



●器は同じでも中身は変えた方が良い

「峰の原高原のこれからは？」

ー「ペンションは世代交代が難しいと思います。建ぺい率もあるので、こじんまりと造っており、プライベートルームも二部屋ほどと少なく、物理的に二世代住むことが難しいです。また、経済的にも二世代が住み、暮らすだけの収入を得るのも難しい。ペンションは子ども世代が帰ってきたら、親世代は出なければいけません。さらに建物も築40年が過ぎ、メンテナンスをしてもあと何十年持つかわかりません。そこで、ペンションを建て替えてまでやろうとは、ビジネスとして、現実的には厳しいことです。車を運転できなくなると峰の原高原を降りざるを得ないし、徐々にペンションの軒数が減っていくことも、人口が減っていくことも、お客さんが減っていくことも自然な流れです。もちろん、若い人が入ってくるのもいいことではあるけれど、劇的にこの流れを食い止めることは難しいです。

また、通年での営業が難しい場所でもあります。オンとオフがあり、観光案内所やそれに併設されたカフェやレストランは営業し辛い。こういう場所だから、普段はガラガラ、繁忙期は混雑、となってしまう。

ペンションは、オーナー世代とお客さん世代がマッチングするんです。私の親世代の常連さんは30歳も年下の私との会話ではやはり違いが出ます。どれほど同じスタイルで同じ質のお料理を提供しても、オーナーの存在感が大きい宿泊スタイル。親世代の常連さんは今では年間で10組ほど。雰囲気を引き継ぐより、全く新しいものをやる方が良いので、器は同じでも中身は変えた方がペンションには良いです。ペンションを経営したい、純粋にここに惚れて山暮らしが好きで、というやる気を持った人がいれば、代替わりではなく、新しい人にペンションを引き継ぐ方がいいのではと思います。そうすれば峰の原高原は持続可能かもしれないですね」



●一生懸命やっておけば何かで繋がってくる

「若者へメッセージをおねがいします」

—「やるとなれば何でも大変。東京から一歩出れば、農家、商店、個人経営のレストランや宿がたくさんあり、人口や観光客が減る中で、みんなどこかで折り合いをつけてやっています。今勉強していることが将来に直接繋がるかは分からないけれど、一生懸命やっておけば何かで繋がってくると思うので、応援しています」

●おわりに

峰の原高原の最盛期を過ごし、二代目としてペンションを経営する中で、“オーナーが変わればペンションが変わる、オーナーが変わればお客さんも変わる”ということを実感されている山下さん。だからこそ、ペンションをやってみたい！という人がいればぜひ来てみてほしいとおっしゃっていました。「同じペンションはひとつもないのだから、ペンション一軒一軒が輝けるような村、個性あるペンションが集う村に。細分化されたツーリストが自分に合ったペンションや観光地を見つけることができる持続型の経営をしていきたいと思います」

オープンガーデン期間真っただ中のガーデンストーリーさん。ぜひ、訪れてみてはいかがでしょうか。

～*～*～*～*～*～

ペンションガーデンストーリーホームページ

<http://www.janis.or.jp/users/v.yama/>

～*～*～*～*～*～

(須坂市地域おこし協力隊 日下未夕)

移住への不安解消にお役に立てばうれしいです / 「須坂市移住者100人の声」を紹介しています！移住後のおもなコメントをピックアップしました

須坂市移住者体験談130人を超えました！

須坂市では毎月2回のメルマガ等で移住者の声を紹介しています。
移住を検討している皆さんは、ぜひ参考にご覧ください。

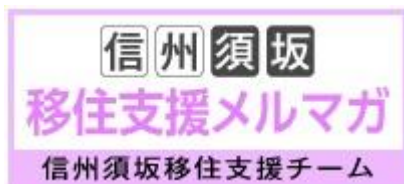
記事は下の画面をクリックしてご覧下さい



須坂市移住関連情報は以下をご覧ください

それぞれクリックしてご覧下さい↓

須坂市移住応援サイト
スザカでくらす



信州須坂移住支援チームです！お気軽にご相談下さい



◆◇問い合わせ◇◆◆◇◆◇

須坂市役所 政策推進課

信州須坂移住支援チーム

〒382-8511

須坂市大字須坂1528-1

T E L : 026-248-9017

メール: iju@city.suzaka.nagano.jp

担当：加藤、豊田

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

No106 ペンションってこんなところvol.10『ロジニアボリア』 / 須坂市地域おこし協力隊 日下未夕の「峰の原高原へお出かけください」vol.13

こんにちは、峰の原高原地域おこし協力隊の日下です。雨や曇りが続く日々が一段落し、青空の見える7月最終日。峰の原高原のこもれび広場には山野草が続々と咲き始めています。

今回もペンションオーナーやオーナー夫人と話して感じた“このペンションってこんなところ”を紹介します。今回は『ロジニアボリア』さんです。



●二代目として峰の原高原に帰ってきました

ロシアボリアの橋本さんは、東京都から須坂市峰の原高原に移住し、ご両親が1979年から経営していたペンションを2014年に引き継ぎました。

峰の原高原で育った橋本さん。会社勤めを経て、次のステップを考えていたところ、ペンションを経営していたお父さんが体調を崩したことを機に、峰の原高原に帰ることを決めました。



●大人の落ち着きとおしゃれな空間

峰の原高原に入り坂道を上っていくとひととき目を引く黄色のロッジ。大きな窓から差し込む光と木材の温かみが大人の落ち着きを、洗練されたレコードや雑貨が大人のおしゃれを感じさせるダイニング。

また、少し区切られた空間にはソファと暖炉があり、時には家族で、時には一人で、団らんやくつろぎの時間を過ごすことができそうな雰囲気があります。



●父の想いと母のパンに合うものを提供します

「父は『常に料理はおいしくなくてはならない』をモットーにしていました。オーナーの想いを引き継ぎ、母が焼く“ロシアボリアのパン”に合うお料理やお酒を自らセレクトし、自信を持って提供しています。“今のままで満足”とならないよう、時には自身が客席に座り、料理の内容や料理を運ぶスピード、その他サービスを見直します」



●お客さんのセカンドハウスになるようなペンションに

「お客さんのセカンドハウスになるようなペンションにしたいと思っています。客室に何があったらお客さんがもっと快適に、居心地良く過ごせるかと常に考えています。自ら客室で寝てみたり、過ごしてみたりして、〇〇があった方がいいな、逆に△△はいらないな、と気づくことができます。また、旅先で宿泊する時にも気を付けています」



●自分の選択は間違えていなかった

「ペンション業とは？」

—「ペンションを引継ぎ五年、やっと慣れて落ち着いてきました。勤めていた時には当たり前のようであったマニュアルがペンション業にはありません。だからこそ、自分が良いと思ったことを取り入れて、良くないと思ったことは改善して、個性を出してやっていきます。また、ペンション業はお客さんとの距離が近く、普通に過ごしていたら出会わない人と出会えます。自分と違う視野の人と出会えたり、知らないことを教えてくれる人に出会えたり。だからこそ、お客さんとの会話やコミュニケーションが大切になります。初対面は特に気を付けています。さらに、これはペンション業に限りませんが、二代目だからこそ、建物の維持や管理に時間とお金をかけなければならなかったり、お客さまへのサービスやお客さまとのコミュニケーションに戸惑ったりということがありました。ただこれは、ペンションをやっていく中でお客さまとの間に“サービスを超える瞬間”があり、それが喜びになるのでペンション業をやっていきます。総じて、“自分の選択（ペンション経営を引き継いだこと）は間違えていなかった”と思っています」

●ペンションも村もよりよくしたい

「峰の原高原のこれからは？」

—「現状維持は衰退、ペンションも村もよりよくしたい、このように考えています。現在峰の原高原に30歳代は数人。その一人だからこそ、地域の活性のための何かをやっていきたいと思っています。新しいことに挑戦して、若い層のリピーター作りをしていきたいと考えています」

●おわりに

峰の原高原で育ち、外に出て働いた経験があるからこそ、峰の原高原の良さ、ペンション業の良さを感じている橋本さん。ドローンを使った撮影やSNSを用いた発信など、この世代だからできることをして峰の原高原やペンションを盛り上げていらっしゃいます。また、地域の観光協会や旅館組合などでも役を引き受けられていて、峰の原高原のこれからを担っていく一人として活動されています。

現在オープンガーデン期間中です。毎年10月に峰の原高原で行われるお菓子パーティーでは橋本さんのお母様が焼かれるパンの販売もあります（今年の開催は未定）。ぜひ、訪れてみてはいかがでしょうか。

～＊～＊～＊～＊～＊～

ロシアボリアホームページ

<https://www.avoriaz.jp/>

～＊～＊～＊～＊～＊～

（須坂市地域おこし協力隊 日下未夕）

No107 家族で身近な自然を楽しんでいます～千葉県から移住 / <移住者インタビュー> おいしいものが作れるまち須坂市に新規就農移住しました

「自分は体を動かすのが好きなんだなあ実感している毎日です」

夢だった農業を目指して2020年3月に奥様と双子のお子さんの家族4人で千葉県から須坂市豊洲地区へ移住した林聡さん。須坂市の新規就農里親制度を利用して4月から里親農家さんの下で研修が始まっています。

林さんは兵庫県出身。大学を経て千葉県の鉄鋼メーカーへ就職し研究所に勤務していました。そんな林さんがなぜ農業の道へ、しかもなぜ移住だったのでしょうか。

林さんご夫婦に話を聞きました。

●以前から触れていた農作物づくり

「以前働いていた研究所では、独自で新しいものを考え、現場に指示を送るという内容の仕事をしていました。毎日振り返る余裕もなく、帰宅が遅くなることもあり、当時は家に帰っても常に頭の中が仕事から離れられずにいた気がします。そんな私を思ってか、ストレス解消になればと妻も賛同してくれたのが千葉県内で開催する百姓塾への参加でした。千葉県特産の落花生をはじめ豆類やイモ類などの野菜作りをしながら、家族で自然に触れる楽しさを身に付けていきました。この経験が新規就農を目指す一因になったのかもしれない」



●移住に迷いはありませんでした

「もともとリンゴやブドウが好きで、長野県内に住む親戚からよくリンゴを送ってもらっていました。『おいしいものを作れるのが長野県』と思っていた私は、農業への憧れもありました。本格的に就農移住を検討するようになったのは、子どもたちの小学校入学準備と自分の今後について考えた時でした。職場では、ちょうど年齢的にも管理職を迎える時期にさしかかっていたのですが、自分に管理職なんて向いているのだろうかと考えた際に出た結論が『14年間もこの仕事に携わることが出来た』というプラスの捉え方による農業への転職でした。移住時期は子どもたちの小学校入学のタイミングに決まり、夫婦そろって気持ちは新規就農移住へと向かいました」



●須坂市の支援体制が力になりました

「東京にある長野県アンテナショップ『銀座NAGANO』で開催していた移住相談会への参加が須坂市と出会うきっかけでした。参加を決めたのも、仕事と住居を一括してサポートしているというホームページを見て支援が整っていると感じたからです。実際、就農相談と同時に妻の仕事や子どもたちの学校と子育て環境、そして住まい探しでは空き家バンクの相談まで多岐にわたってサポートしてくれました。これなら信頼して進めていける！と希望が持てたのを覚えています。就農体験で5～6か所の市町村をまわりましたが、そのなかで親身になってもらっていると実感できたのも須坂市でした。新規就農制度の里親農家さんとの調整や宿泊体験施設の準備など、信州須坂移住支援チームと農林課の連携サポートもあって安心して就農体験に臨むことができました」

●里親農家さんから学ぶ日々

「須坂市で就農体験を定期的に行っていた2019年10月、長野県内を襲った台風19号が里親農家さんの住む地域に被害を及ぼしたことを知りました。ちょうどその1か月前に当時住んでいた千葉県でも台風15号の被害があり、自分たちも食糧などの物資が手に入らず困った経験をしたばかりでした。食糧や水を用意して里親農家さんのもとに駆けつけました」

が、里親農家さんは被害に及ぶ中でも強く前向きな姿勢を見せてくれました。自然との向き合い方を学んだ日でもありました」

「現在、研修が始まっていますが、`自分はプロだ"と意識して働いている里親農家さんの姿から教えてもらうことが多いです。農業は体も頭も使いますが、自分は体を動かす仕事が好きなんだなあと改めてわかりました。作業中にブドウの枝や房を手で確認していると、葉の形も一枚ずつ違うことに気付いたり、日々自分は変わっている、成長できていると実感しています」

●家族で須坂暮らしを楽しんでいます

「千葉県で暮らしていた時は、自然と触れ合う場所までは車を使わなければ行けませんでした。今は身近な自然を相手にしながら生活しています。昆虫や動物が好きな子どもたちは、庭でモグラに遭遇したり、近所でトンボやカブトムシ、クワガタを捕まえて喜んでいます」



「現在住んでいる一軒家はとにかく広いです。自分は田舎の家の造りに慣れていないので、どういう動き方をすればいいのか戸惑っていました。その点、妻は実家が富山県のコメ農家だったので同じような広い家の造りに慣れていたので良かったです。庭に生えるニラやふきを採ったり、身近にある変化を楽しんでいます。現在の暮らしの中で体験できることは子どもにとっても良い環境だと思います。以前とは時間の流れが変わり、せかせかして暮らす感じもなくなりました。子どもたちには、今の田舎暮らしを経験しながら成長し、この先もずっと須坂市で暮らしてほしいと願っています」

●地域で育てる子育て環境

「現在のご近所や地域の皆さんが声をかけて下さり、子どもたちを温かく見守ってくれています。以前住んでいた千葉県では同世代の家族同士で子どもたちを育てている感覚でしたが、今は地域の上の世代の方まで関わって育ててもらっています。子どもにとっても上の世代の方の存在は貴重だと思います。周りの方に子育てを助けてもらっている分、この地域で農業をしっかり学んで身につけ恩返しできるよう自立することが目標です」



「今、世の中は新型コロナウイルスの影響を受けていますが、私たち家族の生活は自然を相手にしながら充実した日々を過ごせています。就農体験研修を通じて先輩移住者から教えてもらったことの中に「奥さんと農業への思いが重なっていないと後になって問題が生じるよ」という言葉がありました。皆さんから得た学びを忘れないように今後も家族で頑張っていきたいです」



●おわりに

東京の銀座NAGANO移住相談会で初めて林さんにお会いした時も、私たちからの情報をしっかりメモにとっていた姿を今でも覚えています。そんな、真面目で優しい双子のお父さん。家族で身近な自然に触れながら田舎暮らしを楽しんでほしいです。フルーツ王国の須坂市を盛り上げてくれることを願いつつ、林さんの作ったおいしいブドウが食べられる日を楽しみに待ちたいと思います。

(2020年8月インタビュー)
須坂市移住・定住アドバイザー 豊田貴子

こんにちは、峰の原高原地域おこし協力隊の日下です。9月に入り、ゲレンデには秋の山野草が咲き始めました。未だ日差しの強い日がありますが、着々と移ろう四季を植物たちが教えてくれます。

今回もペンションオーナーやオーナー夫人と話して感じた“ペンションってこんなところ”を紹介します。今回は『ペンションスタートライン』さんです。



●ペンションスタートライン、スタート！

ペンションスタートラインのオーナー古川さんは東京都から須坂市峰の原高原に移住し、1986年に古川さんのご両親が開業しました。その後古川さんは結婚し、ペンションを引き継ぎました。



●ペンション地下の秘密！

「川に魚を増やしたい」こんな思いから、NPO法人を立ち上げるほど、魚のことを想う古川さん。ペンションの地下には水槽がいくつも並ぶ部屋があり、「山にしながら様々な魚を見られる！」という不思議な体験ができます。また、「どうしても魚を一から育てたい！」という思いから、水利権を取得して、シナノユキマスや信州サーモン、イワナなどを養殖しています。ペンションでは古川さんの愛情をたっぷり受けたお魚たちを季節に合わせていただくことができます。



地下にいるのはお魚だけではなく、採集された昆虫や標本が数々います。はじめはゾクゾクする方もいるかと思いますが、慣れてくると、じっくりとひたすら観察できます。

「ペンションの階段を降りる」それだけの行為にこんなにワクワク・ドキドキすること、他にはないかもしれません。



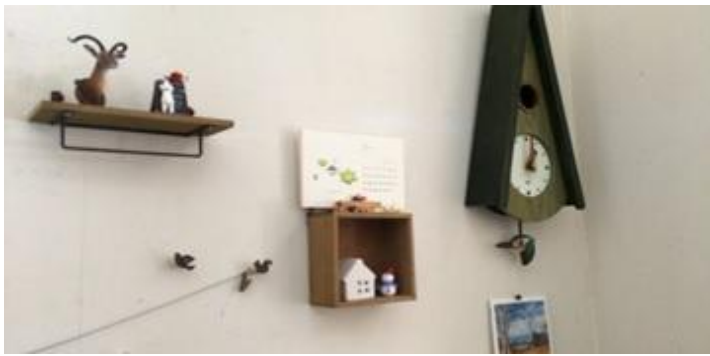
●“好き”が詰まった館内

“ペンションに入ってからお部屋に行くまで”こんな少しの時間で、何冊もの本を目にします。本の種類やジャンルも様々で、絵本やマンガ、文庫に雑誌、魚系や虫系はもちろん、旅や温泉系、お料理系など、とにかく色々あります。どんな方でもきっと気になる本が見つかります。古川さんは本屋に行くと、1日かけて1フロアずつ見て回り、気に入った本はお買い上げだそう。多くの本が館内にあることにガッテン！



そのほか、玄関や廊下には木材や小石のクラフトたち、ダイニングにはほっこりかわいいパステルカラーの雑貨たちが並びます。こちらは奥さんのお好きなもの。色々なところにおふたりの“好き”が詰まっています。





●レシピ本は目で楽しむ！

「ペンションの楽しみの一つ、お料理。ペンションスタートラインのお料理は？」
—「地元食材・自家養殖魚の創作料理。季節のものを提供しています。峰の原高原内で採れた山菜の料理はもちろん、モミジやシラカバなど季節のものを料理の飾りに添えています。味付けは凝ってないけど、おいしいものを心がけています。以前は、料理各々の量は多めで5皿ほどでしたが、現在は量は少なめで7皿ほどにしています。お酒を呑む人向けということもありますが、種類を多くすることで、お客さまが苦手な料理があっても大丈夫なように、という思いもあります」



また、天ぷらや煮物は奥さま、サラダのドレッシングや魚に添える“たれ”を作るのは古川さんと役割を決められているそうです。

「たれを作る時はレシピ本を見ない！レシピ本は目で楽しむ！レシピを学ぶより盛り付けや色合い、他の食材で作ったらどうなるかなどレシピ本を見ながら想像します。あとは食材の香りを大切にしています。たれは、同じものは二度と作れません！」

伺った日のお料理でも、お豆腐には明太子×ごま油×ニンニク、焼き魚にはゆず×ショウガなど、口に入れた瞬間、これなんだろう！と楽しめました。ぜひ、五感をフル活用して、楽しんでいただきたいと思います。



●合宿≠団体

「陸上に限らず様々な合宿に対応されていますが、そのきっかけは？」
 —「元々、団体のお客さんは受け入れていませんでしたが、恩師との繋がりで、中高一貫校の吹奏楽部の合宿を受け入れることになり、受け入れを始めて数年後、一年生だった生徒が引退する年になって。合宿を思って、涙を流す生徒がいたんだよ。これに心を動かされて“合宿を受け入れよう！”と思った。合宿は単なる団体ではなく、子どもたちの成長を見ることができる。一緒に育てている感覚を味わうことができる。OB・OGとして合宿に来てくれる生徒もいるよ」

二階の廊下には、多くの生徒からのメッセージ。ペンションスタートラインでの合宿を経て、次のステップへ。

「自分のスタートライン、初心を忘れないようにとこの名前を付けましたが、今では色々な人にとって意味のある名前になっているようです」



●おわりに

この夏、「星空夜会」や「生き物展」を開催するなど、いつでも新しいことに目を向けていらっしゃる古川さん。生き物や本、写真…ペンションスタートラインにある様々なモノコトが新しい出会いを導いてくれる、そんな場所です。ぜひ、訪れてみてはいかがでしょうか。

ペンション スタートライン ホームページ
<https://olddriver4.wixsite.com/startline>

(須坂市地域おこし協力隊 日下未夕)

まちの情報を行政とは違ったカタチで発信 / 須坂市地域おこし協力隊 宮島麻悠子の『須坂おもしろ人物記』 vol.10

こんにちは！地域おこし協力隊の宮島麻悠子です。
須坂で活躍している方へのリレーインタビュー、今回は横山励子（よこやまれいこ）さんです。



宮島：横山さんといえば、以前市内で発行されていたフリーペーパー「ペチャ＊クチャ」、須坂市子育てガイド「S・Kids」と、市民におなじみの冊子を制作していますよね。「ペチャ＊クチャ」は2009年6月から2015年の12月まで発行されていました。バックナンバーを見てみると、本当にいろんな特集をしていたんですね！給食特集では給食センターへ見学に行ったり、夏になるべく火を使わない料理のレシピを提案したり、ハローワークの利用の仕方を解説したり。座談会形式の記事も、一方的に情報を提供するのとは違い、読者が一緒に話題について考えられるようになっていましたね。どうして「ペチャ＊クチャ」を創刊しようと思ったのですか？



〈歴代ペチャ＊クチャ、S・Kids、ペチャ＊クチャぶち（現在一時休刊）〉

横山さん：私が子育て真っ盛りだった25年ほど前は、「子育ては支援されるもの」という考えはあまりなく、困った時にどうしたらいいのかわからなかったし、子育て世代への情報が届きにくいと感じていました。今でも、未就園児くらいの小さい子であれば、子育て支援センターである程度の情報は手に入るのですが、小中学生くらいの子がいる世代は窓口が分からない。行政が提供しているせつかくの手厚い子育てサポートも、伝え方がいまひとつあまり認知されていないと感じていました。子育て世代の情報源になるような何かがあったらいいなと思っていた頃、小学校のPTAで文平さん（現市立須坂図書館長）と出会い、私はグラフィックデザイナーとして、文平さんはライター・編集者として「自分たちが伝えたいことを伝える」フリーペーパーを一緒に作ろうということになりました。

宮島：そうだったんですね。今はWebやSNSが発達してだいぶ情報にアクセスしやすくなっていますよね。しかしまた、「子育ては支援されるもの」という認識がなかったとは、苦しいですね。。

横山さん：情報の面でもそうですが、昔は医療費や保育料の補助も今ほど無かったですしね。私は栃木県出身ですが、進学を機に東京に出て、横浜市、埼玉県川口市を経て14年前に須坂に移住してきました。横浜に住んでいた時は待機児童が多くて、保育園に預けるのも一苦労でした。

宮島：おっと！実は移住組だったんですね。須坂に来る前は不安じゃなかったですか？

横山さん：全然！私も栃木の田舎で育ったし、高校は山岳部で北アルプスにも登ったりしていたから、元々長野は好きだったんです。主人の実家が須坂で何度も来ていて、町も好きになっていたから全く問題なかった。グラフィックデザイナーとして20代で独立し、固定のお客さんがついていたのでリモートで仕事はできるし。ちょうどネット環境が整いだ

した頃だったんですね。遠くなったので取引先の会社に直接行くことも減って、結果仕事の効率が上がりました（笑）

宮島：リモートワークのはしりだったんですね！やっぱり手に職があるのは強いですね。ところで、今お邪魔している「ペチャ＊クチャハウス」は今年1月にオープンしました。ローソファーが並んでいて、家のリビングルームのようですね。そして漫画がいっぱい！新しいものから懐かしいものまで揃っていて、きれいな漫喫（漫画喫茶）のよう（笑）どうしてこのような場所を作ったのですか？



〈リビングでは、ピアノを使ったミニコンサートを開催することも〉

横山さん：「ペチャ＊クチャ」を作っていた頃から、「核」となる場所があるといいなと思っていたんです。行政の情報も町の情報も得られる場、新しいことに挑戦する人を応援する場、そして、漫喫のように誰でもくつろげる場、ですね。火・木・金・土は予約不要で使える日になっています。Wifiも使えるし、漫喫感覚でぜひ色々な人に利用してもらいたいです。



〈近隣在住のクラフト作家さんの作品を展示販売しているボックスショップ〉

宮島：ありがとうございました！利用人数の制限やアルコール消毒など感染症対策もしているので、安心して利用していただきたいですね。では、次の方を紹介していただけますか？

横山さん：チョークアートの花々堂の小泉和喜子さん。ペチャ＊クチャに投稿いただいたことがきっかけで知り合いました。とても素敵な作品を描かれる方で、ずっと応援しています！

宮島：ありがとうございます！というわけで次回のインタビューは小泉和喜子さんに決定しました。楽しみに！！

◎基本情報

住所 須坂市大字須坂100-2

電話 026-214-3070

Eメール pecyakucya@gmail.com

<https://www.pecyakucya.net/>

リビング開放日

（ふらっと来て自由に使える日）

火・木・金・土 13：00～19：00

*入室は18：00までとなります。

◎えりことサイの観光案内

横山さんのペットの犬のえりこ・猫のサイが長野県内の名所を案内してます。

ぜひご覧ください！（YouTube）

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLsCRHdT99f2wNxVgB5a3wi5wF4B4YTR2n>

★須坂おもしろ人物記バックナンバーは以下のサイトでご覧いただけます
The secrets of SUZAKA 信州・すざかのないしょ話

(須坂市地域おこし協力隊 宮島麻悠子)

No110 須坂市の子育て環境はこんなにも魅力的です / 須坂市公立保育園 の保育士にUターン移住しました



須坂市職員で保育士をしている吉田 望です。
短大卒業後、他県の保育園で働いていましたが、縁があり地元須坂で保育士として働くことになりました。
パート、嘱託職員を経て、正規職員となりました。
現在勤めている日野保育園には、いずみの里という子どもたちも保育士も大好きな場所があります。
ザリガニやメダカを網や手で捕まえて楽しんでいます。



<みんなが大好きな「いずみの里」>



都会の保育園に勤めていましたので、自然の中で思い切り遊び、過ごすことのできる須坂の保育園の素晴らしさに感動しました。

また、自身の子どもも山に登ったり、泥だらけになって思い切り遊ばせることができる環境の中で育てることができ、未だに保育園時代の話を楽しそうにする我が子を見るとつくづく良い経験になったなぁと感じます。

須坂市の公立保育園では休憩代替保育士がいるため、1時間しっかり休憩を取ることができます。また、代替保育士がいるので休みも取りやすく働きやすいです。明るく朗らかで親しみのある楽しい仲間もたくさんいます。こんなに魅力的な須坂市です。ぜひ一緒に働きませんか？



(2020年9月掲載)

移住を希望する皆さん！！

須坂市公立保育園10園でいっしょに働きませんか？

※募集に関する詳細はPDFファイルをご覧ください

★資格を生かし東京都から移住して働く保育士（男性職員）もいます！

＜移住者体験談＞ 東京都から須坂市の保育士になりました

※記事は下の画面をクリックしてご覧ください



★須坂市公立保育園10園一覧情報は下の画面をクリック！



No109 だいすき、みねのはら！ / 須坂市地域おこし協力隊 日下未夕の「峰の原高原へお出かけください♪」vol.15

こんにちは、峰の原高原地域おこし協力隊の日下です。9月後半になり、峰の原高原では白樺やナナカマド、レンゲツツジなどの黄葉・紅葉が進み、秋の深まりを感じます。周りでは、「昨晚は床暖房を入れたよ」「薪づくりをはじめなきゃ！」等、冬支度の様子も耳にするようになりました。

今回は、2020年9月をもって地域おこし協力隊を退任することになりましたので、峰の原高原との出会いや地域おこし協力隊として過ごした間の気づきや想いを綴らせていただきます。この原稿を作成しながら、「やっぱり峰の原高原が好きだな」と思いました。この記事を読んでくださった一人でも多くの方に「峰の原高原に行ってみたい！」「久しぶりに行ってみるか！」とあっていただけると本望です。



●はじめまして、峰の原高原

私が初めて峰の原高原を訪れたのは、2016年4月17日、約四年前のことでした。大学入学を機に初めて長野県を訪れ、「長野県らしいサークルに入りたい!」と思い温泉同好会に入会し、その初めての活動の帰り道、「星を見に行こう!」と先輩方と立ち寄ったのが真夜中の峰の原高原でした。その時は「プラネタリウムより星が見える!」「長野市の夜景きれい!」と感動したことを覚えています。この時は「峰の原高原」という名前も知らず、三年後“暮らす場所”になるとは想像もしていませんでした。

●知ってほしい、来てほしい、再訪してほしい

大学1年生の後期、講義で峰の原高原を訪れました。ペンションオーナーとお客さんの高齢化、ペンション数の減少、空きペンションの増加やそれに伴う景観問題…。様々な課題に直面している現状を目の当たりにし、「峰の原高原のことをもっと知りたい!」と思い、大学2年生から峰の原高原をフィールドに学ぶゼミに所属しました。ゼミ生とともに考えた峰の原高原の弱みは「知名度の低さ」でした。そのためまずは峰の原高原を知ってもらい、来てもらおうと、「ペンションごはん会」や「Mr.ヌーキー大作戦」などの学生対象の企画を行っていました。この頃から地域の方々に企画に協力していただいたり、観光協会のイベントのお手伝いをさせていただいたりと気がつけば月に1回以上は峰の原高原を訪れていました。



ゼミ活動を進めるうちに「また峰の原高原に行きたい!」という声が少しずつ出るようになりましたが、“車があれば”“イベントがあれば”“知り合いがいれば”という条件付きでした。この時、知ってもらえても、来てもらえても、再訪してもらえないと地域の持続に繋がらないと思い、「空きペンションを利活用してふらっと立ち寄れる場所づくりをしよう」と地域おこし協力隊に志望しました。そして、多くの方々のご支援があり、2019年4月、大学に在学しつつ地域おこし協力隊として活動を始められることになりました。

●峰の原高原での日常

上記のように意気込んで地域おこし協力隊になった私でしたが、実際は大学連携として学生向け企画の立案・実行や峰の原高原の案内をしたり、SNSや須坂新聞で連載をさせていただき日々の様子を発信したり、繁忙期となる8月の間に観光案内兼休憩スペースを設置したり、地域の環境整備事業に参加したり、観光協会のイベント補助をしたり、空きペンションの修繕・整備をしたりと様々な業務を行う日々でした。



協力隊となり半年が過ぎた頃から、「自分が必要だと思うもの」と「地域が必要としてるもの」の差異が少しずつ見えるようになり、地域の現状を見間違えていたと痛感しました。大学の講義で学んだり地域の方のお話を聞いたりする中では、「最盛期と比べるとペ

ンション数が減少している、高齢化している地域」というネガティブな印象でしたが、「ココの人はココが好きで日々の暮らしをそれぞれのペースで満喫されていて、過ごされている地域」というポジティブな印象に変化しました。その中で私が当初考えていた「空きペンションを利活用したふらっと立ち寄れる場所」は、ペンション一軒一軒がそれだなのと思うようになりました。これは私がココに住んでいるからという訳ではなく、ペンションオーナーさんがふらっと来た方から「この辺りに喫茶店などありますか」と尋ねられた時に、「峰の原内にはないんですよ。ですがうちでもよかったらどうぞ、大したお構いはできませんけれど」こんな日常がココの日常だったのです。このようなことを何度か見聞きするうちに、きっと私がすべきことは、峰の原高原の存在をただ知ってもらうことではなく、峰の原高原の人を知ってもらうことだと思いました。人を知れば、ハコがなくなつて、その人に会いにくればいいのだから。そこに気が付いてからは、一緒に活動してくれている学生たちを地域の方にできるだけ会わせられるような機会をつくることを念頭に置くようになりました。そうすると、私がココからいなくなっても、学生が地域の方に顔を出すことで、何かの時に役に立てることがあると感じたからです。とはいっても私自身、きちんとお話できた方はココの地域のほんの数軒の方々に限りますし、学生に会わせることができたのも同様だと思います。ただ、少しでもすることが、地域の持続に繋がるのではないかと思います。“地域”や“観光”を学ぶ中で、観光資源は人、と感じてきましたが、地域おこし協力隊になり実感することができました。特に、ペンションを営む方は人好きの方が多く、高齢でペンション業を辞められたとしても、人好きの部分は変わらないぶん、老若男女問わず、ペンション業をするか否か問わず、人が結びつきやすく、地域外の人でも入りやすい地域なのではないかと思います。余談ですが、この夏に数軒のペンションでペンション業のお手伝いをさせていただきましたが、ペンション業はとにかく体力勝負だと感じました。私が言うのも差し出がましいとは思いますが、ペンション業を営みたいと考えられている方は“いつか”ではなく、“できるだけ若い時から”始めることをお勧めします。そして人好きの方々ですから、きっと様々なことを教えてくださると思います。



●自分が暮らす地域

“峰の原高原をフィールドに学ぶ学生”と“峰の原高原の地域おこし協力隊”一番の違いは、峰の原高原に自分の暮らしがあるかどうかだと思います。私はとてもありがたいことに、学生時代お世話になった方にペンションの経営は辞められたけれど峰の原高原が好きで住んでいるご夫婦を紹介していただき、一年半の間、居候をさせていただきました。そうすると、学生企画をするときにお世話になりづらい「観光協会や旅館組合に所属していない方」とお会いすることができました。また、日々のペンションのメンテナンスやお庭のお手入れ、雪かきなど、ココの暮らしの実情を知ることができました。さらに、居候で一人じゃないからこそ、新しい暮らしで様々な発見や戸惑いがあった時に「これは何ですか」と聞くことができ、少しずつ地域を知ることができたと思います。地域に自分の暮らしが

あって初めて自分事として地域のことを知ったり理解したりできるのだと思います。ココに出逢えたこと、暮らせたことに感謝です。



●これから

「山登りもスキーもテニスもしない…どうしてココが好きなの？」
度々質問されました。気が付いた時には峰の原高原に引き込まれ、ハマっていました。私にとっては“高原に暮らすこと”そのものが驚きのことで、来るたびに変わる景色の色や地域の人の顔が見える温かさが心地よかったのかなと思います。
本来ならば、協力隊自身の経験を活かして、地域を盛り上げる活動をするのが地域おこし協力隊なのではないかと思いつつも、私はココで多くの経験を積ませていただきました。ココでの経験は、協力隊活動にとどまらず、これからの暮らしや人生で大切にしたいモノコト、価値観など多方面にわたりました。きっとどのようなこれからを過ごすにしても生きてくるものだと思います。そして何より、地域おこし協力隊としての活動は終了となりますが、峰の原高原が好きという思いは変わりません。これからは違う形で峰の原高原と関わることができたらなと思います。



●おわりに

—この地域をなくしたくない、もっとたくさんの人に知ってもらい、実際に来て、感じてほしい、—
—というのを出発点に、これから活動していきたいと思います—

これは、地域おこし協力隊として一番初めに書いたメールマガジンの記事で自身が綴っていた言葉です。協力隊活動の中で、ココに住んではいないけど、定期的に訪れたり見守ったりしている「峰の原高原好きの方々」がいることを知りました。だからこそ私は「この地域は続いていく」と思います。そして私もその一人として、峰の原高原と関わっていきたいと思います。

初めての方も、再訪される方も、きっと何か心に残るものを峰の原高原は与えます。
ぜひ、峰の原高原にお出かけください♪

さいごになりますが、様々な形でご支援、ご声援をありがとうございました。
須坂市と峰の原高原の繁栄を心から願っています。
だいすき、みねのはら！

(須坂市地域おこし協力隊 日下未夕)

No111 移住後に感じたメリットとデメリット / <移住者インタビュー> 東京都民から須坂市民になって分かったこと

須坂市で転職先が決まったのを機に2019年4月にご夫婦とお子さんの3人で東京から移住されたNさん。

須坂市に移住して1年半が経過した今、移住後の率直な感想をお聞きしました。
移住を検討中の皆さんは、ぜひ参考にしてください。

☆文章中の素敵な写真はNさんが須坂市に移住してから撮影したものです



日本さくら名所100選「臥竜公園」の桜

●移住しようと思った理由と目的

「都内に住んでいた時、希望していた保育園に入れなかったことが移住のきっかけです。その時に子どもの教育環境について考えた結果、移住をしようという決断に至りました。私も幼少期は富山県で育ち、妻も長野県出身だったので、転職するということが以外はハードルが低かったです。妻の実家のある東信地方と北信地方を中心に4市ほど検討しましたが、中でも須坂市の移住相談では大変お世話になり、転職先とのご縁もあって須坂市への移住を決めました」



千曲川堤防付近の桜並木

●須坂市の生活について

「とにかく便利だということにつきます。スーパーやコンビニ、ドラッグストアが市街地の中心部にまとまっていて、暮らす分には困ることはありません。ただ、公共交通機関は都会と比べると便利とは言えないので車は必須です。子育てに関しては、保育園や幼稚園がとても充実しており、各園が自然の中で遊べるよう工夫をしているので、移住してよかったと感じています。娘も幼稚園が大好きで、毎日楽しそうに通っています。また、蔵の町並みやレトロな雰囲気のあるお店が多く、私は須坂の景観がとても好きです。市街地の建物は老朽化でくたびれている感じのものもありますが、反面すごいポテンシャルがあると感じたのも移住の決め手の一つでした。古さを生かしたりリノベーションが増えていくことに期待しています」



須坂市動物園のカンガルー

●移住してメリットに感じたこと

「前職では残業が多めで、深夜や早朝に帰宅することも多く、身体にも大きな負担がかかっていました。転職したことで不規則な生活リズムは改善されましたし、片道10分の通勤時間のおかげで通勤時間にかかるストレスは減り、子どもと触れ合う時間が増えました。また、家賃はとても安く、食生活の部分では野菜や果物がとても安くて美味しいので食卓が豊かになりました。シャインマスカットがワンコインで買えることに驚いています。車は必需品ですが、道路がごみごみしていないので気軽に出かけられます」



市内に広がるブドウ畑

●移住してデメリットだと感じたこと

「当たり前ですが、レジャー施設やおしゃれなお店は都心に比べて少ないです。また、県外でも飛行機を使うくらい遠くに行く場合は、一度東京に出なければならないので、少々大変だなと感じています。生活費は、水道光熱費が都心部のほうが安く、特にガス代・水道代が違いました。それでも家賃が安いので、総合的には須坂市の方がはるかに安いです。ゴミに関するマナーは東京と比べると厳格だと感じました。未だにごみ指定袋に名前を記入するのは抵抗がありますね」



須坂クラシック美術館にて

●休日の過ごし方

「須坂市内にはインターチェンジがあって車のアクセスが良いので、市外に出ることが多いです。県内各地や子どもの好きな水族館のある新潟県上越市などへ行ったりしています。おしゃれなお店やおいしい食事処、カフェを探すのが趣味なので市内外で楽しんでいます。温泉にもよく行きますが、子どもと行くのであれば、須坂市内の日帰り温泉施設「湯っ蔵んど」をおすすめします。温泉以外にもおいしいジェラート屋やパン屋もあるので、お気に入りです。コロナ禍ではアウトドアの時間を多く設けました。長野県内はキャンプ場が多いので密を避けて楽しむことができました」



須坂市内のお気に入りのカフェ「カフェ・ル・パニエ」



濃厚ぶどうジュースがおいしい

●これからの須坂について

「少しずつではありますが町が若返りしている感じはあります。若い人が増えていけばもっと変わっていくと思うので、今後も移住者が増えてくれればいいなと思っています。先の話になりますが、須坂長野東インターチェンジ周辺は、3年後に県内最大規模のショッピングモールが誕生する予定です。北信地方の人のみならず県内の経済に大きな影響を与えると思っています。須坂が生まれ変わる一つの要因になってくれると期待しています」



須坂みんなの花火大会

●インタビューを終えて

今回体験談を語ってくれたNさんは、移住して良かった面も悪かった面もきちんと理解し納得したうえで前に進もうと頑張っています。移住を叶えたとしても、それはゴールではありません。移住は人生の転機であり通過点。須坂市の未来を語ることができるNさんは素晴らしいと思いました。須坂市に移住して良かったと振り返られる人生を送ってほしいと願っています。



峰の原高原のとんぼ

(須坂市移住・定住アドバイザー 豊田貴子)

No112 相手を思い、アイデアを突き詰めるのが楽しい / 須坂市地域おこし協力隊 宮島麻悠子の『須坂おもしろ人物記』 vol.11

こんにちは！地域おこし協力隊の宮島麻悠子です。
須坂で活躍している方へのリレーインタビュー今回はチョークアートの花々堂・小泉和喜

子（こいずみわきこ）さんです。



宮島：チョークアートとはどのようなアートなのですか？

小泉さん：チョークというと学校の黒板に書くものを想像される方が多いかもしれませんが、私が使っているのは「オイルパステル」という画材です。ザラザラした特殊な塗料を塗った黒板に塗り込んで色をのせていきます。元々チョークアートはオーストラリアで飲食店の看板やメニューボードに使われてきたものなんですよ。



〈画材のオイルパステル〉

宮島：そうなんですね！こちらのアトリエにもおいしいそうなお菓子やフルーツなどの作品がたくさんありますね。こちらではこういった飲食店の看板を作ることが多いのですか？

小泉さん：お店だとやはり飲食店の看板やメニューボードが多いですね。他、個人のお客さんだと結婚式のウェルカムボードや喜寿・古希などのお祝いの似顔絵を描くことが多いです。コロナの影響で対面でお祝いをする機会は減ってしまっていますが、直接会えない代わりにギフトとして注文してくださる方が増えています。



〈カラフルで楽しい作品〉

宮島：手描きのあたたかみがあって素敵な作品ですね。食べ物なんて、本物よりおいしそうかも（笑）

小泉さん：チョークアートがいわゆる普通の絵画と違うのは、マーケティング要素がある点なんですよ。飲食店の看板が発祥だから、それを見たお客さんに「食べたい、買いたいと感じてもらう」ことが重要で、自己表現はその後についてくるもの。だから、依頼主さんのやりたいこと、解決したいこと、それを見る人に感じてほしいことをとことん突き詰めて作品に昇華させるんです。それはお店の看板でも、似顔絵やウェルカムボードでも共通していますし、チョークアートの一番の魅力だと思っています。

宮島：なるほど～。広告の制作みたいですね。他にもチョークアートの魅力はありますか？

小泉さん：絵だと写真ではできないことも表現できるのが楽しいです。あとは、ワークショップやレッスンも行っているのですが、易しい題材で基本的な技法や理論が分かれば、絵の経験が少ない方でも上手に描けるのが良いところですね。



〈左側のマカロンと右側のマカロンは下書きは同じ大きさだが、陰影の付け方で平に見えたり膨らんで見えたりする〉

宮島：立体的に見せるのは難しそうかと思いましたが、コツをつかめば比較的挑戦しやすいですね！しかしながら小泉さんがここまでのレベルになれたのは、元々絵の才能があったからじゃないですか？

小泉さん：いやいや、そんなことないですよ（笑）絵は小中学校では「得意な方」だったかもしれませんが、美大に行って絵画を生業にしたいとは思わなかったです。食べ物が好きだったので、東京の大学で食物科学を勉強し、そのまま東京で食品メーカーに就職し、商品開発やマーケティングに携わっていました。この仕事はとても面白かったのですが、同じ会社に勤めていた夫が「地元（須坂）に帰りたい」というので、2010年3月に須坂に移住してきました。

宮島：小泉さんも移住してきたんですね！ちなみに小泉さんがチョークアートを始めたきっかけは何ですか？

小泉さん：2006年に結婚式をする少し前、ウェルカムボードをどうするか考えていた時に、テレビでチョークアートのウェルカムボードを紹介していたのを見て、初めてチョークアートを知りました。その時は特にすぐやってみたいとは思わなかったのですが、ハンバーガー屋さんめぐりをしていた時にチョークアートの看板を見て、おいしそうなビジュアルに感動し、習い始めたのが2009年の夏でした。チョークアートの考案者・モニーク先生に直接似顔絵の技術を習いにオーストラリアにも短期留学して、のめりこんでいました。

宮島：ウェルカムボードを見てもチョークアートをはじめようと思わなかったのに、食べ物の看板を見てスイッチが入るところが、食べ物好き感ありますね（笑）この仕事で大切にしていることはありますか？

小泉さん：作品を制作する時も、生徒さんに教える時も、相手を想像することですね。何がしたいのか、どう感じてもらいたいのかをよく考えます。作品に取り掛かる時も、手を動かす前に分析したり、イメージをふくらませる時間をしっかり取ります。あとは、新し

いことを取り入れること。最近は黒板に描けるマーカーを使う手法を始めました。オイルパステルよりも安く・早くできるので、もっと気軽にチョークアートを使いたいという需要にも対応できるんです。まあ、私自身が新しいことを取り入れないとつまらないから、というのもありますが（笑）本当に好きなことしかやってないです。楽しいのが一番！



〈日当たりのいいアトリエ〉

宮島：本当に好きで、楽しんで描いていらっしゃるのが伝わってきますね。今度10周年記念の個展も開催されるんですね。

小泉さん：そうなんです。川中島のギャラリーで開催します。初心者向けのワークショップもやるので、ぜひお越しください！

宮島：さて、楽しいお話をたくさんありがとうございました。次の方を紹介していただけますか？

小泉さん：カップケーキやバースデーケーキが大人気のTEMO.jpの小林恵梨子さん。先日お店の看板も描かせてもらったんですよ。

宮島：ありがとうございます！というわけで次回のインタビューはTEMO.jpの小林恵梨子さんに決定しました。
お楽しみに！！

チョークアートの花々堂

住所:須崎市大字須坂1445-8小泉ビル2F

電話:026-405-6670

Eメール hanahanadow@gmail.com

<https://linktr.ee/hanahanado>

チョークアートの花々堂＊10周年記念個展

Chalk art +α

期間：2020/11/19（木）～24（火）

時間：10:00～18:00 ※初日は13:00～、最終日は15:00まで

場所：ギャラリータカハシ川中島

長野市川中島町原1392-10（額縁のタカハシ2F）

◎初心者向けワークショップ

期間：2020/11/22（日）、23（月・祝）、24（火）

時間：各日10時～、13:30～（約1.5時間）

参加費：2,700円（税込）※材料費込み

完全予約制

お問合せ・ご予約はEメール hanahanadow@gmail.com まで

★バックナンバーはこちらのサイト内でもご覧いただけます

The secrets of SUZAKA 信州・すざかのないしょ話

（須坂市地域おこし協力隊 宮島麻悠子）

No113 Uターンした当時を振り返るKさん / <移住者インタビュー> Uターンの大きな壁は転職への覚悟と勇気

Kさんは首都圏から須坂市にUターンして11年。奥さんと一緒に地元に戻った後にお子さんが誕生し、現在は自分が育った須坂市で5歳と2歳の二人の子育て真っ最中のお父さんです。地元に戻ろうと考えた当時を振り返ってくれたKさんのコメントには、Uターンへのきっかけや乗り越えるポイントがありました。現在Uターン移住を検討している皆さんは、ぜひ参考にしてください。



●大学進学で東京へ

「須坂市内の高校を経て大学進学のために上京し、そのまま東京で食品メーカーの会社に就職し開発部門で勤務していました。その後、結婚を機に埼玉県に住居を移しましたが、同じ首都圏の電車通勤で30分ほどの便利な距離でした。仕事も順調で充実していた当時は、地元に戻ることもなど想像もしない生活を送っていました」

●Uターン移住のきっかけ

「30歳を過ぎた頃、自分には地元で両親がいる、家や土地がある、どうしたらいいのかと振り返り、具体的に先のことを考えるようになりました。Uターンするにしても定年後なのか今なのか、両方の選択肢で迷っていました。当時まだ子どもはいませんでした。成長してからのUターンでは転校させることになってしまい可哀想だと思いました。自分自身の転職については、年齢が上がるほどやりたい仕事に就けるのだろうかという不安もあり、家族を養っていく収入のことを考えると40歳までに転職して戻った方がいいのかもしれないという思いが明確になっていきました。両親から戻って来いと言われたことはなかったのですが、自分から将来のことを考え始めたのは、普段から地元や両親のことが頭から離れることがなかったからかもしれません。妻もその思いに賛同してくれたため、次の行動に移すことが出来ました」

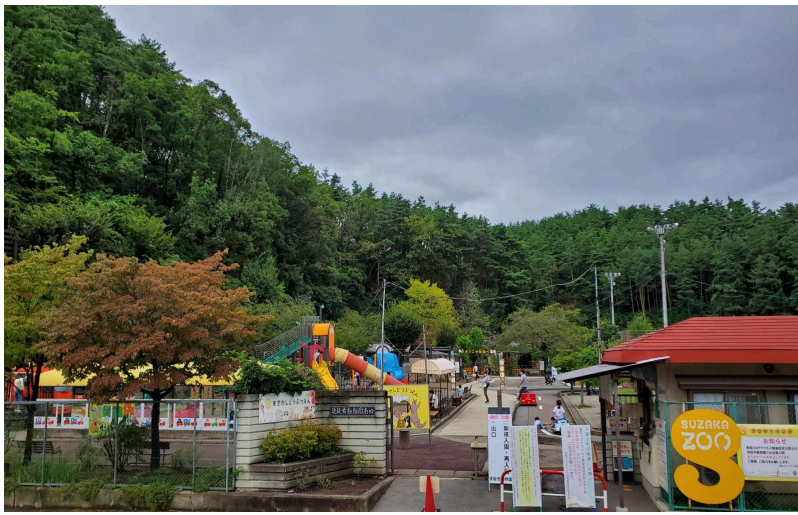


●移住には勇気と覚悟

「家庭も仕事も順調だったため、それまでUターンのことなど真剣に考えたことはありませんでした。まず最初に浮かんだ心配は『仕事はあるのかな?』ということでした。たまたま実家の両親から求職の情報を受けた際に「まずは受けてみよう」と思い立って行動に移しました。その結果採用に至り、勤務していた会社にも退職の意向を伝えました。転職先が決定した時はホッとしましたが、当時の仕事がとても充実していたため、先がまったくわからない中でその環境を捨てることには勇気が要りました。自分にとっては仕事を退職する決断が一番ウエイトを占めましたね。次の仕事が決まった時は、いよいよUターンが現実味を帯びてきたと実感しました」

●子どもが母校の校歌を歌う姿を思う

「須坂市にUターンして11年目になりました。今は子どもたちを須坂市で育てられて良かったと思っています。市内の臥竜公園や動物園の遊園地もよく利用しています。須坂市には里山も川もあって景色の変化が日々感じられます。子どもたちも思いっきり体を動かして遊ぶことができます」



「Uターン以前の暮らしを思うと、須坂市の生活は都会の便利さには適いません。でも不自由さはないですね。便利さはなくても物を買ひ揃えることは出来るし、変わらない生活を送れます。車はあった方が楽しめると思います。都会の日々の暮らしでは、毎日行き交う人が違って、知り合いに会うこともありませんでした。でも須坂市は毎日顔馴染みの人に会います、それが田舎なんでしょうね。須坂市は自然が多い割に、そこまで田舎臭くなくガチャガチャしていない静かな環境、まさに自分が生まれ育ったのは「生活する場所」だと思います。今後は二人の子どもたちも自分の母校に通います。同じ校歌を歌う姿を想像すると今からうれしいです」



●おわりに

今回、Kさんの取材でも「先が見えず不安だった」という言葉が印象に残りました。日頃の移住相談でも、多くの方が抱えている課題は、移住先での仕事の決定と決断です。Kさんも、これまでの仕事を退職していいのか、この先は本当に大丈夫だろうかと決断までに相当な負荷がかかったと話してくれました。先が見えないことで不安が生まれ決断できないこともあると思います。しかし、移住を果たした皆さんは、それを希望に変えて乗り越えた部分が大きいかもかもしれません。「生まれ育った場所に帰りたい」という強い思いが後押ししてくれるのがUターン移住なのでしょう。納得できる転職もその思いが背中を押してくれるのかもしれません。

(須坂市移住・定住アドバイザー 豊田貴子)

永山宏さんは群馬県で生まれましたが、幼少期に長野市に来ます。
高校卒業後、美術を学ぶため東京の専門学校へ行きました。
2018年に結婚し、店舗兼住宅を求め、翌年の2019年須坂市に引っ越してきました。



●手描きの看板屋さん

祖父が絵描きであったためその影響を受け、小さいころから絵を描くことが好きでした。
前職の木材建築金物店で働く傍ら、Tシャツなどをデザインしていたこともあり、閉業を
機に自分の好きな手描きをやろうと決意しました。

「KOKA FACTORY」の名で手描きの看板屋として店を構え、手描き文字やイラストをバイ
クや車などにも描きます。



手描きは唯一無二で、個性があります。それらに加えて風合いもあります。
昔の看板には味があり、その時代の様子が分かります。
文字やイラストにしても同じ物がなく、そんなところが大好きです。
職業病なのか、物を見るとき、イラストや字体が目に入ります。
見たことのない字体に出会うと、ワクワクします。
この仕事は感性も大切で、たくさんの物を見るようにしています。
気になった物は写真に撮るなどしています。
須坂の町並みも好きで、蔵の町の建物や看板からも刺激を受けて得ることが多いです。



●リフレッシュできる自然が豊か

妻の影響を受けて自然にふれる楽しさを知りました。

描くことが仕事なので、自然にふれることで、非日常的な感覚になり、リフレッシュできます。

須坂には自然がたくさんあり、お昼を持って臥竜公園や百々川へ出かけ、ゆっくりした時間を過ごします。

また自宅周辺にも緑が多く、癒やされます。

来年1月には家族が1人増えるので、3人で須坂の自然を満喫したいと思います。



●町や近所付き合い

引っ越して来て感じたことは、近所の温かさです。

町のことを親切に教えてくれたり、妻が妊娠しているため、身体を気遣ってくださいます。

また町の役員や消防団の入団も決まっています。

地域とのつながりを大切にしていきたいと思っています。



(広報須坂2020年12月号掲載記事)